

宋元代の大蔵經と入蔵禅籍

椎名宏雄

中国でつくられた禅籍類の伝播や影響の状況を知るために、宋元代の大蔵經中に入蔵している禅籍の、書誌学的・文献学的な考察は、きわめて重要な意味をもつものである。何となれば、後代における禅籍の母胎をなすものは、宋元代につくられた版本であり、あたかも、この時代の蔵經に入蔵し現存する禅籍は、ほぼ現存最古層のテキストを提供するからである。

いうまでもなく、大蔵經は仏典の最高権威であり、入蔵書は聖典そのものであった。唐代以降、此土撰述の書が入蔵しても、その評価は不变であった。宋代以降の蔵經における特徴として、全文が印刷に付されたことと、此土撰述書の入蔵を増大させたこと、があげられよう。一は唐末から向上した印刷文化の恩恵により、広宣流布を意図したからであり、一は当代佛教界の関心を反映させたからである。

あたかも、唐代から五代・宋朝にかけて空前の隆昌をとげ

しかし、さいわいにも、戦前における大正大蔵經編さんの

た禅界が、大蔵經と密接な関係なものにいたるのは、必然なりゆきであった。周知のことく、この時代の大蔵經への入蔵禅籍の歴史的意義については、すでに柳田聖山氏によるすぐれた論攷があり、⁽¹⁾ 従来きわめて重要でありながら未開拓であつた分野が、十二分に解明せられている。

際に「昭和法寶総目録」三巻が加えられ、各地の大藏書目の多くがはじめて公開され、研究を裨益している。また、その後も個別に調査目録や影印本などが紹介・発刊せられ、必ずしも原典調査によらなくても、ある程度までは藏經研究が可能な状態となっている。

このような情況下にあって、小稿は、できうる限り、金代を加えた宋元代の入藏禪籍とその現存状況をさぐり、今後ににおける文献資料として用いるための、基礎的な方面の整理を意図したものである。

以下、個々の大藏經別に、すべての入藏禪籍を摘出し、それらの函号・刊時・開版者・所蔵・移録などに関する文献資料を整理し、必要に応じて書誌的事項についての論及を試みたいと思う。その目的のために、原本に存する題記・刊語等をはじめ、各所蔵者の現存目録の記事は、資料的意味を考慮して、できるだけ原文を忠実に翻刻・引用することにつとめた。おかげたのご叱正をいただければ、さいわいである。

一、福州東禪寺版

福州閩縣易俗里にある白馬山東禪等覺院(後に東禪寺と改称)において、民間最初の大藏經を刊行し始めたのは、そのもつとも古い題記⁽²⁾によつて、元豐三年(1080)ごろといわれる。この大藏の開雕は、宋朝が国都開封の大平興國寺で行つ

てきた勅版大藏經の出版事業が、政局の不安によつて停止し終熄をみたことが、その直接の原因であつた。⁽³⁾

東禪寺版藏經の特徴として注目すべきは、前代の藏經に比較して、黃卷赤軸に代る木版折本の体裁をとつたことと、宋朝新訳經と此土撰述の仏典を大量に追雕入藏せしめたことにある。いうまでもなく、仏典の広宣流布と、時代の要請に応えるための措置であつた。

かくて、崇寧二年(1103)には崇寧万寿大藏の名を賜わり、勅版に準ずる権威が与えられ、政和二年(1112)には、五六四函、一四三〇余部、五七〇〇余巻におよぶ全藏の完成をみた。南宋となるにおよび、東禪院は東禪報恩光孝禪寺と改称され、紹興年間以後は重修や補刻・追雕がなされ、印経活動は永く元代の至治・泰定ごろまで継続したといわれる。

禪籍の開版史上、この東禪寺版は画期的な意味をもつものである。その入藏禪籍は、最初期の元豊年間における『景德伝燈錄』をはじめとして、左の八種をかぞえる。

- ①『景德伝燈錄』三〇巻
- ②『宗鏡錄』一〇〇巻
- ③『伝心法要・宛陵錄』合一巻
- ④『天聖廣燈錄』三〇巻
- ⑤『建中靖國統燈錄』三〇巻
- ⑥『大藏經綱目指要錄』八巻

⑦『大慧普覺禪師語錄』三〇卷

⑧『大慧普覺禪師普說』一卷

これらの禅籍は、時代の関心と国家の権威づけ、という両面を兼備するものであった。そうした目的のために、東禅寺とその周辺にあつた人びとの動きを、われわれは無視することはできない。この大藏經開雕と禅宗との関係は稿を改めなければならぬが、じつは予想以上に密接な関係が看取されるからである。

とまれ、本邦における東禅寺版藏經の所蔵は、ほぼ完全なセットに近い京都上醍醐寺をはじめ、京都東寺・高野山勸学院などが知られている。いずれも現存目録が公刊されているので、右の八種についての書誌的な事項を整理してみよう。

①景德伝燈錄

本書は、東寺・上醍醐寺・高野山の各宋版大藏經中に現存するが、前二者は東禅寺版の原型を完全に遺す完本と認められる。

まず東寺本は、『東寺藏經一切經目録』によれば、

振1270景德伝燈錄自卷第一至卷第十一元豐三年刊附音釈一帖一帙

纓 同經自卷第十一至第二十一卷第十一第十二無刊記卷第十三元豐五年刊附音釈一帖二帙

世 同經自卷第二十一至卷第三十一元豐五年刊附音釈一帖三帙⁽⁴⁾

と記載され、全三〇卷と一〇卷との音釈三帖が、振・纓・世の三帙に収められていることが知られる。その刊行年時は、卷二七のみが元豐五年（一〇八二）で、他の巻はすべて元豊三年である。

つぎに上醍醐寺本は、『上醍醐寺藏一切經目録』坤の記載によれば、同じく振・纓・世の三函に全三〇巻と音義三巻が存在する。⁽⁵⁾ 刊時は記されていないが、この藏經全体の性格からして、これも東寺本と同じ東禅寺版とみてよいであろう。なお、振・世は千字文の五一一号～五三号に当る。

一方、高野山本については、水原堯栄氏による高野全藏にわたる詳細な調査報告、『高野山見存藏經目録』があり、この中の「勸学院藏宋板一切經目録」と「宋版刊記奥書目録」が当該書に関する直接の指針である。なお、私事ながら、筆者は昭和五八年六月、高野山聖宝館において、この東禅寺版『景德伝燈錄』を閲覧する機会に恵まれ、あたかも九〇〇年の歳月を経て今なお重厚鮮明な古帙を、ふるえる掌で繙いた感動を忘れることができない。

『勸学院藏宋板一切經目録』は、函号順に典籍名・訳者・冊目・欠冊次・冊数・刻工名・印造銘・摘要、の別を記載した学術的な調査目録である。『景德伝燈錄』については、つぎのごとく記載される。

(冊目)	(冊數)	(刻工)	(印造)	(摘要)
一七七振	景德伝燈錄	一一〇	一〇 付元一	王興一一一〇
(瑩)		一一〇	一〇	丁紹成一四一 吳中一八四 王佑二
一七八世 同		三〇	一〇	李意一一一六 楊義一七一八一〇
一七七伝燈錄		一一二〇首		陳仲一一三〇
福州東禪等覺院住持慧空大師沖真於元豐三年庚申歲謹募衆緣開大藏經印板一副上祝今上皇帝聖壽無窮國泰民安法輪常轉		一七八同	首 二一一二六、二八一三〇 同右。二七	缺缺二、三三、三七
女弟子張三十娘与男陳龜逸為		同	二二、二五、二九 尾	
四恩三有捨錢開經板一函		弟子曾億捨錢開此函經願延景福		
勸首住持傳法慧空大師沖真		勸經賜紫洞伯脩住文殊沙門紹登		
同	弟子曾億捨錢開此函經願延景福 (8)	勸首住持法慧空大師沖真		
「何成捨身開一板」(第一紙)		同	二三、二四、二七、二八、三〇 尾	
「陳二十三娘捨身開一片」(第八紙)		弟子曾億捨錢開此函經願延景福 (8)		
同				
一四、二〇 尾				

右の宋版目録と同じく、勸学院の「宋板刊記奥書目録」は、宋版研究にとって貴重な資料集である。いま、『景德伝燈錄』に関するそれを、煩をいとわず転載しよう。なお、この目録中におけるごくわずかの誤脱は、筆者の調査によつて補訂しておいた。

勸首住持伝法慧空大師沖真
大章閣待制知軍州事劉瑾
請主參知政事元緯

同
弟子楊詵恭為
一七、一九 尾

四恩三有捨錢開經板一函

同
首 二一一二六、二八一三〇 同右。二七
同 五年

弟子曾億捨錢開此函經願延景福
勸經賜紫洞伯脩住文殊沙門紹登

勸首住持伝法慧空大師沖真

同
弟子曾億捨錢開此函經願延景福 (8)

同

「何成捨身開一板」(第一紙)

「陳二十三娘捨身開一片」(第八紙)

同

一四、二〇 尾

右の記載により、高野山本は東寺・上醍醐寺両本と同一版ではあるが、音釈三帖を欠くことが判明する。

かくて、本書は東禪等覚院の住持、慧空大師沖真を中心とする力により、皇室の聖寿無窮と国家の安泰という大義名分と、仏法広宣のための開雕であった。本書の開版が、あたかもこの大藏經の最初期であることは、本藏經の宋朝や禪籍に對する姿勢を知らしめるものである。

『景德伝燈錄』三〇巻は、景德元年（一〇〇四）に上進され、大中祥符四年（一〇一二）に入蔵が認められている。『伝燈玉英集』の後序によれば、まもなく模印頒行されたという。しかし、この勅版大藏經の続藏本そのものは世に伝えられぬ。したがって、東禪寺版は現存最古のテキストとして、その資料的価値は絶大である。

② 宗鏡錄

本書の東禪寺版は、東寺・上醍醐寺の蔵經本、および高野山・旧積翠軒文庫・北京図書館などの端本、が知られる。これらの中で、原型の完本とみられるのは東寺本である。

『東寺経蔵一切経目録』に著録される本書は、かなり詳細であり、貴重な資料であるから、つぎに転載しておく。

1271 祿宗鏡錄自卷第一至卷第十一 大觀元年五月刊但卷第九 同年六月刊附音訛一帖 一帙

修 同經自卷第十一
至卷第二十一
卷第十一第十二第十四大綱元年六月刊卷第十三第十七同年五
月刊卷第十五第十八同年七月刊卷第十六第十九第二十同年八

音月刊
一帖附
二帖

富同經自卷第二十一至卷第三十一
第二十一大綱元年七月刊卷第二十二第二十三同年八月刊卷第二十四
第二十五第二十六第二十八同年九月刊卷第二十七

宋元代の大藏經と入藏禪籍（椎名）

右の記載により、本書は大觀元年（一一〇七）五月から翌一
年九月にかけて刊行され、全一〇〇巻が祿より茂にいたる一
〇帙に収められ、一〇巻ごとに音釈一帖づつをもつものであ
る。また、上醍醐寺本も、目録では刊時が記載されないが、
編成は東寺本と全同であるから、これも東禪寺版の伝本と推

る。また、上醍醐寺本も、目録では刊時が記載されないが、¹⁰

編成は東寺本と全同であるから、これも東禅寺版の伝本と推

定してよい

一方、高野山本は、わずか残存四冊のみの零本である。

(冊目)(欠冊) (冊数)(刻工) (印造)

(摘要)

一七九 宗鏡錄

一一

肥同

五一

五五、五二、

四五、五六、

五八、六〇

陳通五三

陳富五五

五五、五三、

五五、五七、五九、

帙欠五三、

首欠五三、

尾欠五七、五九、

同

六一(11)

一〇〇

一一

右のごとく、高野山本は、卷五三・五五・五七・五九を現存するにすぎない。しかし、「宋板刊記奥書目録」は、これらの巻の首尾に遺存する次の題記を載せ、高野山本が東禅寺版なることを知らしめている。

一七九 宗鏡錄 五五 首

福州等覚禪院住持伝法広慧大師達果収印経板頭錢恭為

今上皇帝祝延聖(破) 欠位雕造

宗鏡錄一部計一十(破) 欠月 日謹題

尾都勾当藏主沙門師悟

都勸首住持伝法広慧大師達果

前都勸首住持伝法慧空大師沖真

都大勸首応賢良方正能直言極諫科陳暘

証会靈應侯王

福州等覚禪院住持伝法広慧大師達果収印経板頭錢恭為

今上皇帝祝延聖壽闡郡官僚同資祿位雕造

なお、同じ東禅寺版『宗鏡錄』の題記は、別に小野玄妙氏が東寺本によつて卷六一・六二・四一・八一のものを紹介しているので、左に転載しておく。

宗鏡錄卷第六十一

福州東禪等覚院住持伝法広(?)慧大師達果収印経板頭錢恭為今上皇帝祝延聖壽闡郡官僚同資祿位雕造宗鏡錄一部計一十函 大觀二年七月 日謹題

(第六十一以下七十マデハ住持伝法沙門普明ナリ)
宗鏡錄卷第六十二 輕

福州等覚禪院住持伝法沙門普門収印経板頭錢恭為今上皇帝祝延聖壽闡郡官僚同資祿位雕造宗鏡錄一部一十函 時大觀二年二月 日謹題

福州等覚禪院住持伝法沙門普明取印経板頭錢恭為今上皇帝祝延

聖寿闡郡官僚同資祿位雕造宗鏡錄一部計一十函 時大觀二年

二月 日謹題

宗鏡錄第八十一 功

福州等覚禪院住持伝法沙門普明取印経板頭錢恭為今上皇帝祝延
聖寿闡郡官僚同資祿位雕造宗鏡錄一部計一十函 時大觀二年四
月 日謹題⁽¹⁴⁾

右の諸題記により、東禪寺版『宗鏡錄』は、時の東禪等覚院住持普明・広慧大師達果・前住持沖真、などの尽力によつて開雕をみた禅籍であつたことがわかる。その刊行は『景德伝燈錄』よりはるかに遅れ、この大蔵の完雕に近いころであつた。

なお、『石井積翠軒文庫善本書目』によれば、

宗鏡錄 卷第七十五・八十 二帖

各卷首に大觀二年の刊語あり。卷末に「福州東禪經生林受印造」黒印記、卷首に「東禪」朱印記、及び卷首尾に「能仁禪寺大蔵」の黒印記あり。帙補修。⁽¹⁵⁾

すなわち、右の東禪寺版とされる宋版『宗鏡錄』は、大觀二年から半世紀以上を経た紹興二八年（一一五八）の刊記をもつてゐるようである。東禪寺版藏經は、全蔵の完成をみたのち、紹興一八年（一一四八）には板木の重修と補刻がなされ、以後にも追雕がなされている。したがつて、北京本が目録のとおりであれば、紹興二八年に『宗鏡錄』の補刻がなされたことを示す貴重な遺品である。補刻そのものは、一般の儒要傾向と、それに応える印施活動の実態を示す点で、注目しなければならない。

③伝心法要・宛陵錄

これらの二書は、常に合冊で伝えられるため、ここでも一括して扱いたい。東禪寺版藏經では、次の『天聖広燈錄』の首部と同帙に収められている。東寺・上醍醐寺に現存し、高野山はこれを欠く。

まず、東寺本は、『東寺經藏一切經目錄』によれば、

とみえ、本書の端本二巻が、かつて積翠軒文庫に所蔵されていたことが知られる。現在、その行方は不詳である。

さらに、『北京図書館善本書目』卷五、子部下、釈家類には、つぎの記載が存する。

宗鏡錄 一百卷宋积延寿撰 北宋大觀元年福州等覚禪院刻萬壽大蔵 紹興二十八年印本 一冊

存一卷^三

1272 実 1272 筠州黃檗山斷際禪師伝心法要

1273 黃檗断際禪師宛陵錄右二經同卷 大觀三年正月刊

1274 天聖広燈錄都帙目錄一卷大觀三年正月刊

口上四經十二卷 共一帙⁽¹⁶⁾

と著録される。すなわち、本書は『天聖広燈錄』の首部に付せられて、大觀三年（一一〇九）正月に刊行された現存最古のテキストにはかならない。函号は実字で、千字文の第五二四号である。音釈は存在しない。音釈といえば、上醍醐寺本の蔵經目録には、刊時こそ記されていないが、やはり「音義無之」とあるから、これも同一版であろう。本書には、元来音釈は存在しなかつたものと思われる。

④天聖広燈錄

本書は、いずれのテキストにも付けられる巻頭の景祐三年（一一〇三六）、仁宗の御製序をもって、その性格をものがたる灯史書である。⁽¹⁷⁾ 東禪寺版は、東寺・上醍醐寺・高野山に所蔵される。首部は、前掲の③『伝心法要・宛陵錄』と同帙である。

東寺本は、『東寺經藏一切經目録』によれば、前掲の実字函の記載につづいて、

勒 同經<sub>自卷第十一
至卷第二十
大觀三年正月刊但卷第十四同
年三月刊卷第十五同年四月刊</sub> 二帙

碑 同經<sub>自卷第二十一
至卷第三十一
大觀三年正月刊但卷第二十九同年
三月刊卷第二十五同年正月刊</sub> 三帙⁽¹⁸⁾

とみえる。すなわち、本書は大觀二年（一一〇八）正月から翌

三年四月にかけて開版され、実・勒・碑の三函に収められたのである。音釈はない。上醍醐寺本の目録は、例により刊時を欠くが、「音義無之」とあり、これも同版にほかならないであろう。

ちなみに、東寺本『廣燈錄』の巻一と巻二に存する同一の題記が、小野玄妙氏により紹介されているので、左に転載しておこう。

福州等覺禪院住持伝法廣慧大師達果収印経板頭錢恭為今上皇帝祝延聖壽闡郡官僚同資祿位雕造廣燈錄一部計三函 時大觀三年正月 日謹題⁽¹⁹⁾

一方、高野山本は、巻二〇～三〇のみの端本である。「勸學院藏宋板一切經目録」によれば、

天聖広燈錄
(冊目)(欠冊)(冊數) (刻工) (印造) (摘要)

碑 同 二一 一〇 李興二
三〇 林盛二
二二 二二 二二 二二
二二 二二 二二 二二
二二 二二 二二 二二

帙欠二
二八

林宗陳用二
右二五
王二八七
葉平三〇⁽²⁰⁾
陳孟二九
平三〇

のように著録される。また、「宋版刊記奥書目録」は、本書

の題記四点をつぎのごとく紹介している。

天聖広燈錄二一一三〇 首

福州等覺禪院住持伝法広慧大師達果收印經板頭錢恭為

今上皇帝祝延聖壽闡郡官僚同資祿位彫造

広燈錄一部計三函時大觀三年正月 日謹題（二九八三月）

同 二一、二六、二九 尾

都勾当藏主沙門介先

都勸首住持伝法広慧大師達果

前都勸首住持伝法慧空大師沖真

都大勸首応賢良方正能直言極諫科陳暘

証会靈應侯王

同 二三 尾

都勾当藏主沙門介先

都勸首住持伝法広慧大師達果

都大勸首応賢良方正能直言極諫科陳暘

同 二八 尾

都勸首住持伝法広慧大師達果⁽²¹⁾

都大勸首応賢良方正能直言極諫科陳暘

これららの題記や記載によつて、本書の開雕は、東禪等覺院

の住持、広慧大師達果をはじめとして、前住持の沖真その他多くの人びとの尽力によつて成ったことが知られる。

なお、前項の③『伝心法要・宛陵錄』の二書を本書に前付することの意味については、すでに柳田氏によつて、当代の関心に基づく当事者の任意入蔵であろうと言及されている。⁽²²⁾

とすれば、その当事者とは、右にいう達果等であつたにちがいない。

⑤建中靖国統燈錄

本書は、仏國惟白が編録し、建中靖国元年（一一〇一）に上進して徽宗の序を賜つた灯史書である。東禪寺版は、上醍醐寺に唯一の完本があり、東寺・高野山・南禪寺には端本が所蔵される。

まず、くわしい目録の『東寺經藏一切經目録』は、東寺本来のよう記載する。

刻 1276 建中靖国統燈錄上帙目録一卷

1277 建中靖国統燈錄自卷第一至卷第十一 卷第一無刊記卷第二乃至卷第五第十崇寧二年十月刊卷第六第八同年十一月刊卷第七同年九月刊卷第九崇寧三年正月刊

一帙

銘 同經中帙目録一卷崇寧三年六月刊

同經自卷第十一至卷第二十一 卷第十一崇寧二年十二月刊卷第十二第十三崇寧三年二月刊卷第十四第十五第十六第十七第十九同年三月刊卷第十八同年六月刊

二帙

碑 同經下帙目録一卷

同經自卷第二十一至卷第三十一 卷第二十一乃至第二十五紹興十八年閏八月刊卷第二十六至卷第三十一崇寧三年五月刊卷第二十七同年六月刊卷第二十八乃至卷第三十同

三帙⁽²³⁾

三函に収録されるが、音義は存在しない。刊行は崇寧二年

(一一〇三) 一〇月から翌三年七月にかけてであるが、卷二
一から二五までは紹興一八年(一一四八)八月の刊行である。

後述するように、紹興一八年には開元寺版の『続燈錄』が開
版されているから、この五巻の補配は開元寺版にほかならな
いであろう。なお、小野玄妙氏は東寺本巻一〇の題記を紹介
しているので、以下に掲げておく。

	(冊目)	(次冊)	(冊数)	(刻工)	(印造)	(摘要)
一八〇	刻 建中靖國続燈錄	東京法雲禪寺 住持伝法仏國 禪師臣惟白集	一一	一	九	李英二、四
			一〇		一〇	陳禧二一四、六一
				林元七	帙欠三、六一八	
				謝感一〇		
				陳通一四		
			一〇	吳守一四		
				王惠一、二、三		
				一四〇		
				王惠(25)		
					帙欠一一、一三、	
					尾一八二三	

建中靖國続燈錄中帙 右同
目録

すなわち、高野山本は、巻一～一〇までのうちの一巻と目
録一巻、および、巻二～三〇と同目録とを欠く断欠本であ
る。しかし、遺存部分には、「宋板刊記奥書目録」によつて、
左の記事が存在することが知られる。

一八〇 続燈錄 首 二一五、一〇 三行五 十月。六、八 三
行五 十一月。七 三行五 九月。九 三行五 三年正
月。一一 三行五 十二月。一二、一三 三行五 三年
二月。一四一、一七、一九 三行五 三年三月。 一八

建中靖國続燈錄卷第十

福州等覚禪院住持伝法沙門普明収経板頭錢恭為今上皇帝祝延聖
寿闡郡官僚同資祿位雕造続燈錄印板一部計三函 時崇寧二年十

月 日謹題

次に、高野山本については、「勸学院藏宋板一切経目録」
に左の記載がある。

三行五 三年四月。二〇 三行五 三年六月
同 四 尾

都勾当藏主沙門靈肇
同勾当住聖泉寺伝法沙門紹登
都勸首住持伝法沙門普明
証会靈応侯王

都勾当藏主沙門靈肇

同勾当住聖泉寺伝法沙門紹登

都勸首住持伝法沙門普明

前都勸首住持伝法慧空大師沖真

勸首応賢良方正能直言極諫科陳暘

左朝請大夫知福州軍州兼管内勸農事

充福建路兵馬鈴轄上柱國借紫王祖道

請主參知政事元絳

証会靈應侯王

同
一六 尾

都勾当藏主沙門靈肇

都勸首住持伝法沙門普明

続燈錄中帙目録 首 三行五 三年六月⁽²⁶⁾

右のとおり、高野山本は東寺本と同じ東禪寺版であること

はいうまでもない。しかも、巻一～一〇中の欠巻が第一巻で

あることも判明する。注意すべきは、巻九の巻末に勾当住聖

泉寺伝法沙門紹登・都勸首住持伝法沙門普明の名がみえるこ

とである。今日、わが続藏中に収める『続燈錄』巻一三と三

〇の巻末には宋版の刻記をとどめるが、ここにも同様の名が

みられる。普明と紹登は、驚くことに、この『続燈錄』中に

略伝や機縁の語句がみられる人たちなのである。

思うに、本書の入蔵は、惟白による上進から間もない二〇

三年後であった。惟白が、生存中の普明や紹登の条を設けた

のは、あたかもこの藏經刊行に功績ある両者の名を遺すためであつたか、あるいは、本書の入蔵を意図したはからいであつたか、けだし興味あるところである。

次に、本書は京都南禪寺に端本を有することが、『南禪寺經藏一切経目録』によつて知られる。

刻 建中靖国続燈錄上帙目録写本

建中靖国続燈錄自卷第一至卷第十一 卷第一宋本卷第二第四第五第六第七第九第十已上写本卷第八北宋本崇寧二年十一月刊

一帙⁽²⁷⁾

右により、南禪寺本は巻一と巻八の二帖のみが東禪寺版である。また、上醍醐寺には、目録によれば全三〇巻と目録三巻が存在し、「音義無之」とみえる。⁽²⁸⁾ 刊時を記さないものの、全藏の性格からして、現存唯一の完本と思われる。

⑥大藏經綱目指要錄

本書は仏國惟白の撰述であるため、ここでは禪籍としてとりあげておく。東禪寺版は、東寺・上醍醐寺のものが知られる。

『東寺經藏一切経目録』には、つぎのように記載される。

渓 1278 大藏經綱目指要錄八卷卷第一崇寧四年十月二十九日刊卷第二乃至第八無刊記 一帙⁽²⁹⁾

すなわち、本書は『続燈錄』に統く渓字（第五三〇号）の函

におかれ、崇寧四年（一一〇五）一〇月の開雕であった。それは、同じ惟白の編にかかる『続燈錄』開雕の翌年であるから、これら二書の入蔵・刊行は一連のものであつたことが察しられる。

上醍醐寺本は、目録に

溪第五百三十

綱目指要錄(30)

とみえるだけであるが、おそらくは東寺本と同版であろう。なお、高野山の蔵經では渢字函を欠き、本書は欠本となつている。

⑦大慧普覺禪師語錄

⑧大慧普覺禪師普說

これらの二書は、東禪寺版の大蔵が完成した後に、新たに勅旨を得て入蔵した書といわれる。⁽³¹⁾ いわゆる続蔵本である。原刻本の所蔵は、東寺・上醍醐寺に完本、天理図書館に端本が知られる。

まず、東寺本は『東寺經藏一切經目錄』に左のごく記載される。

多 1430 大慧語錄自卷第一至卷第十 卷第一(乾道八年正月刊)他無刊記 一帙

士 同錄自卷第十一至卷第二十 卷第十一(乾道七年十二月刊)他無刊記 二帙

寔 同錄自卷第二十一至卷第三十一 第二十一(乾道七年十二月刊) 三帙(32)

右の目録には東禪寺版と明記されないが、その作製者である小野玄妙氏の言からして、まず東禪寺版と断定してよい。かくて、右の二書は、乾道七年（一一七一）一二月から翌八年正月にかけて開雕され、東禪寺大蔵の多・士・寔の三函に收められたのである。音釈は存在しない。

上醍醐寺本は、目録によれば、同じ函に三一巻を所蔵する。就中、『普說』一巻の巻末写真が毎日新聞社編『重要文化財』二一に掲載され、そこに貴重な印造銘・捨錢刊記がみられるので、つぎに移録しておく。

福州東禪經生王惠印造

前住南劍州福興寺比丘尼慈性同衆

優婆夷十名

王冲捨二貫 無際 無盡 法安 法光

法如 観志 道寿 道祥 彦休各捨十貫

共捨錢一百一十貫文入東禪寺經藏

刊行

御降大慧禪師語錄一函永遠流通
各符願心功德円満者乾道七年十

一月日勸縁比丘尼慈性謹題

一方、『天理図書館稀書目錄』には、左の記載がみえる。

大慧禪師法語 宋版 刊二卷二帖 二六八

宗果(宋)著「徑山能仁禪院住持嗣法慧日禪師蘊上進」の序、

宋版経式紺色包表紙 九寸五分四寸〇分 天地单辺七寸九分
六行十七字、題簽なし外題中央金泥「大慧禪師法語卷第(卷数)
寔」柱心(二十四)「寔四卷 板数」震・方(二十五)「寔五卷
板数」英・李

(宋版一切經東禪版の一、「福州東禪經生王惠印造」)

一般に、「大慧禪師語錄」三〇巻本の構成は、卷一九～二四が法語、卷二五～三〇が書、であるから、右の天理本二帖は、「法語」の末尾と「書」の首部に該当するものであろう。いittai、「大慧禪師語錄」の東禪寺本系統とみられるテキストに大正藏経本がある。大正藏経本は、増上寺所蔵の明藏方冊本(万暦一三年～一五八五刊)を底本とし、五山版と称する二本で対校している。底本の巻頭には、乾道七年三月に『語録』の編者、蘊聞による入藏秦劄文と、翌年正月の東禪寺徳潛による題記をおき、巻末には同年正月、蘊聞の入藏謝礼文を付している。これらの三文は、いずれも東禪寺藏経本に存したと思われるから、以下、煩をいとわず記載しておく。

進大慧禪師語錄奏劄

臣僧蘊聞竊以仏祖之道、雖非文字語言所及、而發揚流布、必有所
仮面後明。譬如以手指月、手之与月初不相干、然知手之所指、則
知月之所在。是以一大藏教為世標準。于今賴之臣山野微賤・遭值
聖明、屢獲瞻望清光、稟承音旨、聖言高遠非凡所及、斯道慶幸有

待而興。竊欣希闊之逢、敢陳誠切之懇。伏念臣先師前住徑山大慧
禪師宗果、敏悟英發、直受正伝、善巧方便、開悟後学。其平日提
唱語要、臣隨處記錄、皆已成書、既為廣錄三十卷、又為語錄十
卷。謹繕写詣闕上進。伏望万機之暇、俯垂省覽、臣又伏見真宗皇
帝景德年中、以僧道原所集伝灯錄。頒降入藏。今臣所進先師語錄
十卷。欲乞聖慈依上件体例、特賜指揮亦令入藏、用廣流通、使後
學皆得預聞、在先師益為不朽。臣無任戰灼、俟命之至取進止。乾
道七年三月 日 径山能仁禪院住持慧日禪師臣蘊聞奏劄

福州東禪報恩光孝禪寺本寺承知府安撫大觀文公文備准御批、降大
慧禪師語錄十冊、令真之名山大藏中、以永其伝。住持臣僧徳潛謹
刊為經板、計三十卷、入于毘盧大藏、用廣流通。以此功德、恭為
今上皇帝、祝延聖壽無疆、仰願皇國鞏固、鳳歷長新、仏日增輝、法
輪常轉。乾道八年正月 日。住持臣僧徳潛謹題34)

謝降賜大慧禪語錄入藏奏劄

臣僧蘊聞、昨於乾道七年三月中、不懼天誅、以先師大慧禪師臣宗
果語錄投進。仍乞特旨、送福州入藏。伏准、五月十九日聖旨已送
福州東禪寺入藏訖者。冒昧上陳、方虞罪戾、恩光下逮、俯賜矜諒、
梵祚重輝、山澤增氣、凡居聞見罔不歡欣。恭惟皇帝陛下、如天鑑
觀得仏心法、念微言之易泯、參秘藏以並伝。先師臣宗果植百劫之
勝因、逢千載之嘉会。公微有幸、得叨預於殊榮焚誦何功。冀仰酬
於大造、臣無任瞻天望聖激切屏營之至。乾道八年正月日。徑山能
仁禪院住持慧日禪師臣蘊聞奏劄³⁵⁾

これらの三文と開元寺版『大慧語錄』との関係については、
開元寺版の項にのべる。

二、福州開元寺版

東禪寺と同じ福州の閩県城東芝山開元寺において、大蔵經の出版が開始されたのは、あたかも東禪寺大蔵の完成をみた政和二年（一一一二）のことであった。この蔵經は、やがて毘盧大蔵の名を賜わり、紹興二一年（一一五一）に全蔵が完成するが、その後も統蔵の雕造や補刻などが行われ、印経活動は元の大徳年間にまでおよぶ。

本蔵經への入藏禅籍は、左記の一三種をかぞえる。

- ①『景德伝燈錄』三〇卷
- ②『宗鏡錄』一〇〇卷
- ③『伝心法要・宛陵錄』合一卷
- ④『天聖広燈錄』三〇卷
- ⑤『建中靖國統燈錄』三〇卷
- ⑥『大蔵經綱目指要錄』八卷
- ⑦『伝法正宗記』九卷
- ⑧『伝法正宗定祖図』一卷
- ⑨『伝法正宗論』二卷
- ⑩『輔教篇』三卷
- ⑪『円覚略疏注經』八卷
- ⑫『大慧普覺禪師語錄』三〇卷
- ⑬『大慧普覺禪師普說』一卷

右の禅籍中、東禪寺版にない⑦～⑪におよぶ五種目の増加は、契嵩による一連の著作と宗密の経疏であり、契嵩のものは、すでに勅版蔵經の統蔵中に入藏が許されている禅籍であった。

本邦において開元寺版を主体に構成される蔵經には、宮内庁書陵部・京都知恩院・岩手中尊寺・愛知真福寺・愛知本源寺・横浜金沢文庫、などのものがある。就中、目録が公刊されているのは、書陵部・知恩院・本源寺・金沢文庫である。これらの目録と影写、実物調査などによつて、前掲一三種を整理してみたい。

①景德伝燈錄

本書の開元寺版は、書陵部・金沢文庫・京都大学図書館・本源寺、などに所蔵される。

まず、書陵部本は、『図書寮漢籍善本書目』に附録の「大蔵經細目」中に左の記載がある。

振字函至世字函
字音帖闕振二卷二帖
景德伝燈錄僧道原纂
三十卷

闕刊行年月及地名（開元禪寺板）卷二十六紙背墨書「九
州肥前下松浦五島青方住僧鶴堂再興天文二年八月春国」（36）

筆者が該書を閲覧したのは、昭和四八年五月のことであるが、たしかに振・纓・世の三函に三〇巻三〇帖、音義二帖を

現存する。しかし、本書には題記や刊記が皆無であって、わずかに卷一〇の巻末に左記の捨錢刊記をとどめるにすぎない。

大莊嚴寺僧祖夔拾錢開經

一函追薦孝妣超生淨界者

ここにみえる大莊嚴寺も祖夔も不明であり、本書が開元寺版たることの直接資料とはなりえない。

一方、金沢文庫所蔵の宋版大藏について、『金沢文庫古書目録』⁽³⁷⁾中に著録されているが、概して簡単な記載にとどまる。ただし、主要な禪籍は影写本が駒沢大学に所蔵されて、研究を容易にしている。金沢文庫本の本書は欠巻が多いが、遺存するのは左記の各巻である。

振 一、五、六、七、一〇、音釈

縷 一一(尾欠)、一二(首欠)、一三~一七、一八(尾欠)、一

九、二〇(中欠)、音釈

世 二一~二六、二八、三〇

この金沢文庫本と書陵部本とは、まったく同一版である。

そしてまた、これまた同版とみられるのが京大図書館本である。すなわち、同図書館の蔵書カードによれば、館内の谷村文庫に宋版大藏経覆刻とされる左の二〇冊が所蔵される。

振 卷一~一〇 (第六・七・八・九合巻二冊)

縷 卷一一~一八

世 卷二七~三〇⁽³⁸⁾

なお、卷一〇の巻末には、「大莊嚴寺僧祖夔……」なる刻記を存するという。したがって、京大本は書陵部や金沢文庫の本と同版の断欠本である。なお、福州版藏經の補刻や重修はなされているが、京大本は題記や刊記がないために、これを覆刻本とみなしたのであるろう。

いったい、開元寺版『景德伝燈錄』は、もともと無題記・無刊記だったのではないだろうか。なぜならば、近年、愛知県本源寺(海部郡祖父江町)経藏の宋版大藏經の調査結果が紹介されているが、その目録中に開元寺版『景德伝燈錄』の端本(縷字函、巻一二・一二)の一帖が見える。版元の印(開元經局か)を存し、題記はないという。また、ほかにも無題記の『景德伝燈錄』、巻二〇・二二・二四・二七・三〇の五帖と世函の音義一帖をも所蔵するという。

元来、本源寺の藏經は、もと京都東福寺塔頭の三聖寺所蔵本であり、三聖寺→東福寺→覺証寺→本源寺と伝承された福州版主体の混合藏經である。最後尾に近い『景德伝燈錄』の周辺は、ほとんど開元寺版である。したがって、右の無題記六帖もまた、開元寺版の可能性が強い。

筆者は、さきの書陵部・金沢文庫の両本を、一紙三六行の版式、音釈の存在、他の東禪寺版と一致する刻工名、などの諸点にもとづき、本版は東禪寺版の補刻本と推定したことがあ

(40) しかし、その後に各種の蔵經目録や実物調査の結果、福州版には一紙三〇行も三六行も相互に混在し、音釈の有無も

一樣でないことを知った。刻工名の一致にいたっては、同じく福州において、さしたる年代の隔りもなく相ついで開雕された両蔵に、同一刻工が従事するのは決して不自然ではない。

のみならず、本書にみえる刻工名中、「付言」の名は、開元寺版の題記を有し隆興二年（一一六四）刊行の『伝法正宗記』にも頻出する事実がある。したがって、これが同一人であれば、本『景德伝燈錄』の刊行も隆興二年をさして隔らぬ時期、ということになろう。

ともあれ、書陵部も金沢文庫も、所蔵者側は開元寺版とみてること、右にのべた本源寺本の事例などにより、前言を改めて開元寺本と推定しておこう。ただし、この重要な禪籍になぜ題記等がないのかという疑問は、いぜんとして永解しない。開元寺版の善本セットとして知られる知恩院蔵經は、なぜか本書を欠く。これらの究明は、なお今後の課題であろう。

②宗鏡錄

本書は、書陵部・知恩院に完本、金沢文庫に約半数を所蔵し、その他、端本の所蔵者は多い。

まず、『図書寮漢籍善本書目』付録の「大蔵經細目」には、

左の記載がある。

禄字函至茂字函

宗鏡錄
宋延寿集
一百卷

字音帖十卷十帖
百帖

關刊行地及年月（開元禪寺板）前有左朝郎尚書礼部員外郎護軍揚傑序及天下大元
帥吳越國王俶序卷百尾墨書「寃政二年辛巳三月十日宮道親忠転了」每卷有「法華元
山寺」印又紙背有「開元
經局染黃紙」長大方印記（41）

すなわち、本書は東禪寺版と同じ禄～茂の一〇函に各一〇卷一〇帖と字音一帖づつ、計一〇〇卷一一〇帖より成る。刊記はないようであり、刊時不詳であるが、大正蔵經本と同じく、王俶と揚傑の序をもつテキストであった。

一方、『知恩院一切經目録』によれば、

振 纓 世

宗鏡錄一百卷

大宋吳越國惠日永明寺主智覺禪師延壽集

禄同	從第一卷	至第十卷
侈同	從十一	至二十
富同	從二十一	至三十
侈同	從三十一	至四十
車同	從四十一	至五十
駕同	從五十一	至六十
肥同	從六十一	至七十
軽同	從七十一	至八十
策同	從八十一	至九十
功同		

茂同 従九十一 至一百 (42)

該の『宗鏡錄』については左記のとおりである。

第十九 東京・森潤三郎氏蔵
第二十 京都・鈴鹿三七氏蔵

第五十二 京都帝国大学附属図書館蔵
第六十三 愛知・日下無倫氏蔵

第六十四 京都・水原堯栄氏蔵
第七十 和歌山・水原堯栄氏蔵

第七十九 京都・今西春秋氏蔵
第八十三 東京・巖松堂書店蔵

第九十九 京都・松本文三郎氏蔵
愛知・舟橋水哉氏蔵 (43)

とある。この目録は、版別・刊時・音義などについて記載しないため、詳細は不明であるが、知恩院蔵の性格からみて、おそらくは書陵部本と同版とみられる。
また、金沢文庫本は、『金沢文庫古書目録』所収の「金沢文庫旧蔵書目」と「宋版大藏經目録」との記載の間には、なぜかくい違いがみられる。いま、後者の記載と影写本とにより、その現存卷次を示すと、次のとおりである。

緯 一〇八、一〇

侈 一六一、一四〇、一六

富 三〇二、二六〇、二八、三〇

車 三九 四二、四三、四五、四八、五〇

駕 五六、五三、五六

肥 六九、六六、六八、六九

軽 七二、七七、八〇

功 八一、八七、八九

茂 九七、九四、九七、一〇〇

このように、金沢文庫本の遺存卷数は存四三卷である。な

お、この文庫本は、むかしかなり流出したようで、前掲の「旧蔵書目」は各地に現存する文庫旧蔵書を著録するが、当

右に記載される所蔵者の、その後の移動などは不詳であるが、この文庫の旧蔵書は、まだ各地に残存している可能性がある。

一方、『北京図書館善本書目』卷五、釈家類には、左の記載がみられる。

宗鏡錄一百卷宋紹延寿撰 宋福州開元寺刻毗盧大藏本 一冊 六五五二
存一卷七十四

なお、その他の目録類によれば、宋版藏經本で版式不明の『宗鏡錄』には、大阪府立図書館本（卷二四）、京都大学人文科学研究所蔵本（卷四七）、同大学谷村文庫本（卷六四）などがあり、今後の調査を期したい。

③伝心法要・宛陵錄

本書の開元寺版は、東禪寺版と同じく、つぎの『天聖広燈錄』の首部と同帙（実函）の第一帖となつていて、所蔵は、知恩院・書陵部・金沢文庫などが知られる。

知恩院本は、『知恩院一切經目錄』に
実 瓯州黃檗山斷際禪師伝心法要〔44〕一卷

とあり、また、その影印が『禪學叢書』之五に収められ、すこぶる学界を裨益している。

本書には、巻頭に題記、巻末に捨錢刊記と印造銘が、つぎのごとくみられる。

福州開元禪寺住持伝法賜紫慧通大師了謹募緣恭為
今上 皇帝祝延 聖壽文武官僚資崇 祿位円成雕造
毗盧大藏經板一副皆紹興戊辰八月 日 謹題

(巻頭)

長樂縣賓賢里女弟子劉十一娘謹捨淨財彫造
茲經一卷広流聖教為保平安願延壽筭者

陳和造

(巻末)

淨業寺尼道鵬謹抽亡師兄心上座衣資一百貫文省彫斯經
板一函資助竟畜生界仍薦心上座考妣双魂願生仏地者

(巻一、五、七、一〇、各末尾)

右のごとく、本書は紹興一八年（一一四八）八月の刊行であつて、現存本としては東禪寺本につぐ古いテキストである。なお、書陵部本・金沢文庫本は、それぞれ目録と影写本によって知恩院本と同一なることがたしかめられる。

④天聖広燈錄

本書は、知恩院・金沢文庫・書陵部・本源寺などに所蔵される。前二者は完本で、知恩院本は『禪學叢書』之五に影印されている。

知恩院本は、『知恩院一切經目錄』には、前掲した実字函の『伝心法要』一卷の記載につづき、以下の記載がみえる。

天聖広燈錄都帙目錄一卷
天聖広燈錄三十卷

鎮國軍節度使騎馬都尉臣李遵勗編

同 徒第一卷 至第十卷
勤同 徒十一 至二十 (45)

すなわち、本書は東禪寺版と同じ実・勤・碑の三函に全三帖を収録するものである。そして、知恩院本の各巻首には、前項③と同一の題記が、また、都帙目録の末尾には、やはり同一の捨錢刊記と印造銘が、それぞれ刻される。さらに、各巻の末尾には、左のごとき多くの捨錢刊記がみられる。

淨業寺尼道鵬謹抽亡師兄心上座衣資一百貫文省彫斯經
板一函資助竟畜生界仍薦心上座考妣双魂願生仏地者
候官縣崇福院比丘尼守恩守思守光共施衣資鏤玆經板
一卷流通聖教共報四恩下資三有法界含生同円種智

(巻一、末尾)

住當山慧通大師了一回施仏生日衆請升堂懶資雕造

茲経板一巻願仏日増輝法輪常転諸家檀信増延福慧

(卷一〇、末尾)

閩県崇賢里女弟子陳氏十五娘法名惠宗施財開斯經一

函為答四恩普資三有并及自身懺除罪愆願早生淨界

西法林院賜紫比丘尼德欽謹施衣資鏤茲経板一巻流通

聖教為薦亡考謝三十六郎妣陳三娘尊魂願生淨界

(卷一三、末尾)

法林院尼徳超螺州朱勸与室葉卅八娘朱珍与室葉卅四娘捨
錢參貫劉卅四娘施財一貫共雕斯経板一巻用符心願円満者

(卷一四、末尾)

候官縣榮親里女弟子黃十五娘謹施淨財雕造

茲経板一巻流通聖教為保平安願延寿筭

(卷一五、末尾)

法林院比丘尼祖沢謹施長財鏤茲経板一巻広流

聖教為報四恩普資三友井及保安願延法筭

(卷一六、末尾)

候官縣美宅里女弟子陳氏九娘謹捨淨財彫斯經一巻為報

四恩普資三友法界含生并及自身乞保平安願延寿筭

(卷一七、末尾)

刊(紹興十八開元寺版)⁽⁴⁷⁾

とあり、知恩院本と同版の完本なることが判明する。

また、書陵部本は、『宮内省図書寮一切経目録』によれば、

実字号

天聖広燈錄 宋李遵_{勗編} 一一〇 告興一
五帖 八・閩八

勒字号

同 上 同 上 十一〇 告興一
十一二〇 告興一
八・閩八

碑字号

(卷一九、末尾) 同 上 同 上 十二〇 告興一
一一三〇 告興一
八・閩八

住当山慧通大師了一回捨衆会桑僧施主請升座懶資開斯經一巻流
通聖教普報恩有爰及在會檀信或男或女各願增延寿筭者

(卷一九、末尾)

西法林院尼円機謹施衣資開茲経板一巻流通
聖教為報四恩普資三友法界含生共円智種

と記載され、欄外注記によれば、欠巻は二~六の各巻なるこ

とが知られる。

一方、本源寺本は、その紹介目録によれば、卷二一～三〇の一〇帖を所蔵し、卷二九と三〇には「謝寧印造」の印造銘を有するものである。⁽⁴⁹⁾ この印造銘は、金沢文庫本によって確認され、ともに同版なることが判明する。

⑤建中靖国統燈錄

本書は、書陵部・金沢文庫・知恩院のものが完本に近く、東寺・本源寺・叡山文庫等には端本が所蔵される。

まず、書陵部本は「大藏經細目」により、

刻字函至礎字函

建中靖国統燈錄 惟白集三十卷闕卷一附上中下帙目録三卷 三十二帖 ⁽⁵⁰⁾

のごとく、卷一を欠帖とする。また、『宮内省図書寮一切經目録』には、左の記載がある。

刻字号

建中靖国統燈錄 惟白集白集 上帙目録同卷

紹八・閏八

銘字号

同 上 同 上 中帙目録一及一一二〇 十一帖

紹八・閏八

礎字号

同 上 同 上 下帙目録一及二〇一三〇 十一帖

紹八・閏八 ⁽⁵¹⁾

右により、本書は元來三三帖が、東禪寺版と同じ刻・銘・礎・の三函に收められ、紹興一八年（一一四八）八月の開雕であつた。この刊時は、前項④の『天聖広燈錄』に等しく、両者同時の統藏入函であつたことを知る。

次に金沢文庫本は、「宋版大藏經目録」によれば、

刻字函至礎字函

建中靖国統燈錄 宋・惟白集

残本廿九卷自三目卅二帖至一四七

刊（紹興十八開元寺版）全冊卷内卷第四闕

とあるごとく、卷四だけを欠く開元寺版である。存卷中、卷一は尾欠、卷一七は首欠である。

本書には、上下の帙目録と卷一を除く各卷首に左の題記がある。『広燈錄』と同じく、開元寺住持「」の尽力による開雕であつたことを知らしめている。

福州開元禪寺住持伝法賜紫慧通大師了「謹募衆緣恭為

今上 皇帝祝延 聖壽文武官僚資崇祿位円成雕造

毗盧大藏經板一副旨紹興戊辰閏八月 日

謹題

また、各巻末には左の捨錢刊記が刻されている。金沢文庫

本によつて掲載しよう。

崇福院比丘尼智本謹施衣資鏤刻字経板一函広流

聖教普為恩友考妣二親願生淨界并及自身保安者

(上帙目録・卷二、各末尾)

懷安県高遷里慶安院尼徳真謹捨衣資彫大藏銘字函

経板上五卷為報四恩普資三友法界含生同円種智者

(卷一一～一五、各卷末)

閩県侍仕里女弟子王小二娘与男葉武謹施淨財雕大藏

銘字函経板下五卷流通聖教為保平安増延寿筭

(卷一六～二〇、各卷末)

西法林院比丘尼祖玉謹施衣資開礮字函板壱卷

広流聖教為報四恩普資三友法界含生同円種智者

(卷二一末尾)

道清院比丘藏顯謹施衣資彫大藏礮字経板一卷広流

聖教為薦亡考□十一郎妣林十四娘尊魂願生淨界者

(卷二二末尾)

西法林院尼徳本謹施衣資彫大藏礮字経板二卷広

流聖教為薦亡考林十二郎妣駒氏七娘尊魂願超淨界者

(卷二三末尾)

閩県仁惠里弟子陳聘謹施淨財彫大藏礮字経板一卷

広流聖教祈保祖母鄭氏三十一娘向去平安増延寿筭

(卷二四末尾)

西法林院比丘尼徳本謹施衣資彫礮字経板二卷広流
聖教為薦亡考林十二郎妣駒氏七娘尊魂願生淨界者

(卷二五末尾)

西法林院比丘尼祖琳謹施衣資開礮字経板一卷広流

聖教為薦亡考余太郎妣□氏大娘尊魂願生淨界者

(卷二六末尾)

西法林院比丘尼祖順謹施衣資開礮字函経板壱卷

流通聖教為報四恩普資三友法界含生同円種智者

(卷二七末尾)

西法林院比丘尼祖悟謹施衣資開礮字函経板壱卷

流通聖教為報四恩普資三友法界含生同円種智者

(卷二八末尾)

慈明大師祖光謹施衣資開礮字函経板壱卷庶

広流聖教薦資亡妣李氏念一娘尊魂超生淨界

(卷二九末尾)

永平里女弟子王氏小七浪李十八娘□施淨財開礮字経板

壱卷広流通聖教各□自身向去平安増延寿筭者

(卷三〇末尾)

一方、『知恩院一切経目録』によれば、本書の調卷は

刻 建中靖国統燈錄上帙目録一卷

東京法雲禪寺仏國禪師惟白集

建中靖国統燈錄三十卷 同集

同 従第一卷 至第十卷

銘同 従十一 至二十

外目録一卷入

礮同 從二十一 至三十 同断(53)

とみえ、磻函の目録を欠く三二帖の現存が知られる。刊記等は記載されないが、知恩院藏經の性格と、直前の函に開元寺版『廣燈錄』をおくことから推して、右の三函もまた開元寺版であると思われる。

次に、『東寺一切經目録』によれば、磻字函の本書については、

卷二十一乃至第二十五紹興十八年閏八月刊⁽⁵⁴⁾

とあり、卷二十一～二十五の五帖が開元寺版であることがわかる。

叡山文庫本については、関西での「第一六回大藏会展観目録」の中に、

13 建中靖國続燈錄 二冊 (三十卷十
五冊ノ内) 近江 叡山文庫藏⁽⁵⁵⁾

とみえ、卷一・二・二七・二八に存する前掲の各刻記を掲載している。展覽が二冊で刻記が四卷分であることからも、叡山本は三〇巻が一五冊に仕立てられているのであろう。

また、本源寺本については、その目録により、紹興戊辰閏八月の題記をもつ開元寺版が、磻字の卷二二・二三の二帖を現存することが確認される。

⑥ 大藏經綱目指要錄

本書の開元寺版における函号は、東禪寺版と同じ「渙」であるが、書陵部にはこの函を欠き、わずかに知恩院の所蔵が知られるのみである。

しかし、『知恩院一切經目録』においても
渙 大藏經綱目指要錄八卷 (同集⁽⁵⁷⁾)
とあるのみで、刊時等も不詳である。いまはこの藏經の内容からして、この渙字函は開元寺版と考えておきたい。

⑦ 伝法正宗記

⑧ 伝法正宗定祖図

⑨ 伝法正宗論

⑩ 輔教篇

これら四書は、開元寺藏經では、この順におかれ一括されているので、ここでも一括して扱いたい。開元寺版の所蔵者は、書陵部・金沢文庫・知恩院・本源寺などである。

まず、書陵部本は、『宮内省図書寮一切經目録』に、左の「ごとく記載される。」

践字号

伝法正宗記
編集 宋契嵩
一八帖

土字号

伝法正宗記
編集 宋契嵩
一八帖

同 上 同上 九、一、一二
帖

輔教編 (マヤ) 同上撰
上中下帖

一方、「大藏經細目」の記載は左のとおりである。

伝法正宗記 宋契嵩撰
十二卷

十一帖 阿同 徒九 至十二

輔教編 宋契嵩撰
三卷

輔教編三卷 同撰 (6)

以上二釋闡刊行地及年月(湖州板)前經卷十二末有嵩明教之在新氏扶持正宗排斥畢說辭而闡之咸有援據所謂障百川而東之迴往瀕於既倒者也諸老出力其広此書皆籍湜誠用心也隨喜心之緣有大於此者乎隆興甲申十一月
既望在奉儀郎前提舉福建路市舶晉安林之寄書數行 (59)

これら二つの目録により、書陵部本は卷一〇の「定祖図」を欠くこと、卷一二の「正宗論」末尾に隆興甲申一一月に撰した林之奇の抜語があること、などが知られる。

ところが一方、金沢文庫の「宋版大藏經目録」には、左の「ごとく記載される。

時字函阿字函

伝法正宗記 宋・契嵩編

刊 全十二卷内卷第三・十闕

輔教編 宋・契嵩撰

残本十卷十帖 一五一
一五二

三卷三帖 一五⁽⁶⁰⁾

のことく、金沢本と一致する。ところが一方、本源寺本の目録によれば、現存は卷一一だけの零本ながら、土字函の開元寺本とされている。ちなみに時・阿は五三四号と五三五号、践・土は五八一号と五八二号であり、かなりの開きがある。

このような問題は、当該藏經全体の考察を前提としなくてはならないであろう。いまは、かつて大藏經研究の大御所であつた小野玄妙氏の所説⁽⁶³⁾に従い、右二書の開元寺版は践・土の二函が本来のもの、したがつて、書陵部本と本源寺本が本来の函号とみておきたい。

ところで、大正藏經五一卷に収める『伝法正宗記』は、明版を底本とし、これを宮内省図書寮の宋本と対校するが、「定祖図」のみは対校をしない。したがつて、この宋本なるものは、現在書陵部藏の「定祖図」を欠く開元寺版藏經本そのものを指すのであろう。

これまで、本書は嘉祐六年(1061)に撰述して上進され、翌年に入蔵が許され、三年後に吳郡万寿寺で開版されたとい⁽⁶⁴⁾う。本書があたかも一世紀後の隆興二年(1164)に開元寺大藏に補雕入蔵した際は、『輔教篇』三卷を加えて新たに校院一切経目録』では、

伝法正宗記十二卷 藤州東山沙門紹契嵩編修

時同 従第一卷 至第八卷

宋元代の大藏經と入蔵禪籍(椎名)

(11) 円覚略疏注經

本書は一般に『円覚經略疏』と呼ばれる宗密撰述の經疏である。蔡運辰『二十五種藏經目錄對照考計』によれば、本書は毘盧藏の衡字に配せられている。⁽⁶⁵⁾開元寺版とみられる所蔵者は、書陵部と知恩院である。

まず、知恩院本は、『知恩院一切經目錄』に左の記載を見るのみである。

衡 大方広円覚略疏注經八卷

終南山草堂寺沙門宗密述 (66)

一方、これと同じ衡字函（五三六号）に本書を収めるのは書陵部の藏経のみである。書陵部の「大藏經細目」には、左のごとく記載される。

衡字函

大方広円覚略疏注經

唐宗密述
八卷

八帖

關刊行地及年月（東禅等院板）前有釋休序一張三十行一行十三字
注文雙行二十字文字板式又稀觀者紙背有「開元經局染黃紙」長大方印 (67)

また、「大藏經細目」の記載はつぎのことくである。

闕字音帖

多字函至寔字函

上蘊聞

前有乾道八年

大慧普覺禪師住徑山能仁禪院語錄

三一卷闕卷十

六至十九四卷

同 上 同 上 十二一三〇帖 七・一二道
大慧普覺禪師普說續付 全一帖 紹一九・五興 (68)

士字号

同 上 同 上 一一一五
及二〇六帖

大悲普覺禪師住徑山能仁禪院語錄

宋蘊聞

一一一〇帖 乾道
十帖 八・正

(12) 大慧普覺禪師語錄
(13) 大慧普覺禪師普說

右二書の開元寺版で遺存が確実なのは、書陵部本である。『宮内省図書寮一切經目錄』には、左のごとく記載される。

このように、書陵部本は東禪寺板ともみられているのであるが、紙背の版元印と知恩院本の性格などから推して、これらはおそらく開元寺版の新入藏書（おそらくは補雕本）であって、現存最古のテキストである。

以上二經乾道八年開元禪寺板每卷有「法華山寺」
印又紙背有「開元經局染黃紙」長大方印記

(69)

卷末有妙喜
宗果之跋

大慧普覺禪師普說

妙喜宗果書
一卷

一帖

右の二つの目録の間には若干の差異がみられるが、書陵部本『語録』は卷一六・一九の四巻を欠く断欠本ながら、東禅寺本と同じ乾道七年（一一七一）から翌年にかけて刊行され、これまた同函の多々寔に収まる開元寺版である。また、『普説』一帖には、紹興一九年（一一四九）五月の年記があることがわかる。

東禅寺版の本書の項でのべたごとく、本書の大正蔵経本は明版を底本とし、これを五山版と称する二本で対校する。その校本である宮内省蔵五山版なるテキストには、前掲の蘊聞による上進文と謝礼文、徳潛による題記、などの三つの文がなく、代って巻頭には開元寺紹玉による左記の題記がおかれている。（傍点筆者）

福州開元禪寺伏蒙判府安撫大觀文相公恭准御批、降大慧禪師語錄十冊、令眞之名山大藏、以永其伝。住持臣僧紹玉謹募檀信刊為經板、計三十一卷、入于本寺印造盧毗大藏經院、用廣流通。以此功德、祝延今上皇帝、睿筭無疆、恭願蘿岡永固、鳳曆弥新、仏日增輝、法輪常轉者。乾道八年正月 日 住持臣僧紹玉謹題⁽⁷⁰⁾

キストは、開元寺蔵経本にほかならぬという。また氏は、乾元七・八年に開雕された『大慧語録』は、東禅寺・開元寺両大藏への同時追雕であろうと論及している。⁽⁷¹⁾ たしかに、すでに注意されるごとく、『仏祖統紀』四七、淳熙三年（一一七六）の条下における勅福州依天聖二年已降聖旨、天台一宗教部、附開元・東禅鏤版入蔵。⁽⁷²⁾ のごとく、天台教文が両寺の大藏に等しく追雕入蔵した事例が知られるから、『大慧語録』の入蔵も同時とみられなくもない。ただし、蘊聞の謝秦文は、東禅寺への入蔵を謝するのみであるから、開元寺版への実際の入蔵は、紙一重ほどおくれたのではないであろうか。

また、紹玉による題記にみえる一巻の差は、石井氏によれば、東禅寺本に漏れた不足分三点の増補であつて、紹興の年記は末尾におかれる法語の識語であるという。とまれ、他の開元寺本が知られぬ現在、書陵部本の存在価値はすこぶる大きい。

三、金蔵版

文面は徳潛のそれと比較すると、三〇巻が三一巻あるほかは同文である。ところで、書陵部の宋版蔵経本の『大慧語録』を実際に調査された石井修道氏によれば、書陵部には五山版『大慧語録』は存在せず、右の紹玉による題記をもつテ

民国二三年（一九三四）八月、山西省趙城県広勝寺から金國開雕の大藏経が発見され、以後、その紹介や研究が盛んとなつたのは周知のとおりである。

金蔵の現存目録は、蔣唯心氏により、『宋蔵遺珍叙目』中に「廣勝寺大蔵經簡目」として公刊され、金蔵中の古逸仏典四六種を影印した『宋蔵遺珍』一二〇冊とともに、すこぶる学界を裨益している。今日では、それらの再印も刊行されている。

金蔵の開版事業は、山西省解州静林村天寧寺において、皇統九年（一一四九）ごろに開始され、大定年間（一一六一～八九）に完成したといわれる。黄巻赤軸に一紙一四字二三行の版式は、北宋勅版のそれに等しい。天寧寺の板木は、後に燕京弘法寺に移されて補刻がなされ、元代の欽定蔵經として施経活動を継続した。元代の『至元法寶勘同總錄』一〇卷は、この欽定蔵經とチベット蔵經との対照目録であった。

時あたかも、一九八四年から大陸で刊行が開始された『中華大蔵經』は、内容見本によれば、仏典四二〇〇余種、二三〇〇余卷を收め、全二二〇冊を一〇年がかりで影印・刊行しようとする壮大な計画である。この新編大蔵經の正編部分は、金蔵を底本とし、これを高麗蔵をはじめとする他の蔵経で補充するという。したがつて、計画どおりの刊行が進めば、年ならずして、金蔵の遺存全体が影印によって容易に閲覧・研究の対象となるはずである。

右の内容見本に紹介される。金蔵の現存状況はつぎのとおりである。

- 1 広勝寺本（広勝寺にて発見、現在は北京図書館・上海図書館等に所蔵）……四八二七卷
 - 2 大宝集寺本（チベット薩迦北寺にて発見、現在はチベット民族文化宮図書館に所蔵）……五四〇卷
 - 3 興國院本
 - 4 天寧寺本
- （天寧寺の初雕印本）
- さて、金蔵に入蔵している禪籍を「廣勝寺大蔵經簡目」から摘出すると、左記の六種である。
- ①『伝燈玉英集』一五卷
 - ②『円覺經道場修証義』一八卷
 - ③『天聖廣燈錄』三〇卷
 - ④『宝林伝』九卷
 - ⑤『景德傳燈錄』三〇卷
 - ⑥『万善同帰集』三卷

いずれの書も、勅版大蔵經の続蔵部分の書を承けての入蔵書であり、①④のごとき新出文献も含めて、テキストとしての資料価値は高い。なお、①と④は『宋蔵遺珍』中にも影印収録されている。

①伝燈玉英集

道原の『景德傳燈錄』三〇卷を、丞相王隨が刪定して一五卷とした本書は、金蔵発見により、はじめて世に知られるに

いたつた逸書である。影印が『宋藏遺珍』上集第四函に收め

られ、その再印が『禪學叢書』之五、台灣版『中華大藏經』

第一輯第三八冊、に所收されて、閲覽は容易となつている。

しかし、本書は断欠本であつて、卷別の存欠状況は左のごとくである。

(全存) 二、五、六、一二

(首欠) 三、八、一〇、一四、一五

(全欠) 一、四、七、九、一一、一三

なお、本書の書誌的事項については、筆者もかつて考察したことがあるので、詳細はそれにゆずり、ここでは重要な諸点を列記しておく。

1 金蔵本は沙・漠の函号を有する巻子本である。

2 しかも金蔵本は、元来既刻の小冊子本(毎半葉一一行)を巻子に再装訂したものである。

3 『宋藏遺珍』所収本は、影印して冊子に装訂する際に原本の版心を削除している。

4 本書は景祐元年(一〇三四)に王隨が一五卷五冊を上進し、翌二年に入蔵が許され、同三年に刊行された。

5 したがつて、金蔵本は上進の際における五冊本の原型を伝えている可能性が強い。

なお、本書について記載する『至元法寶勘同總錄』(一二八五)の記事を左に掲げておこう。

1634 伝燈玉英集十五卷 翰林大學士楊億等撰

上一集十五卷二帙勅聆⁽⁷⁴⁾二号

②円覺道場修証義

本書は、唐代の宗密が撰述した大部の礼儀儀である。從来は、正統蔵本によつて本文を知るのみであつた。金蔵のほかには、宋元代における他のいづれの大藏經にも入蔵されていない。「廣勝寺大藏經簡目」には、本書は左のごとくに記載される。

(丹青) 円覺道場修証義十八卷_{唐宗密述今存十四卷}⁽⁷⁵⁾

すなわち、本書は全一八卷中、一四卷を現存する断欠本である。しかし、『宋藏遺珍』等にも影印されず、遺憾ながらまだ本文は公開されていない。したがつて今後、影印が収録されると思われる大陸版『中華大藏經』に期待するところ大である。ちなみに、函号の丹・青は第六〇六・六〇七号に当る。

③天聖広燈錄

本書は、「廣勝寺大藏經簡目」には、左のごとくに記載される。

(九一禹) 天聖広燈錄三十一卷_{宋李遵勗編今存二十八卷}⁽⁷⁶⁾

このように、本書は九・州・禹の函号をもち、三卷を欠くものの、大部分を現存することが知られる。しかし、前項②

と同様、影印公開もなく、研究の対象とされていない。今後の大陸版『中華大蔵經』での影印を期待したい。

なお、函号の九一禹は第六〇九号一六一一号に当り、『至元法寶勘同總錄』が本書の函号として記載する鑑・貌・弁の第六九一号一六九三号とは大きな隔たりがある。

④宝林伝

初期禪宗史における重要な燈史文献である本書の出現は、金蔵中の稀書として、とくに注目された一書である。したがって、その影印が『宋藏遺珍』上集第三函に収められ、『禪學叢書』之五と台灣版『中華大蔵經』第一輯第三八冊に再印されている。

本書は、「廣勝寺大蔵經簡目」では、左のごとくに記載される。

(秦) 双峰山曹溪宝林伝九卷

唐智炬集
今存六卷(77)

元来の一〇巻本が、金蔵開雕の際に九巻となつた理由については、巻二の首尾に存する左記の刻記によつて明らかである。

(卷首)

失第二第十兩卷而

京師徧問皆無

遂取聖胄集立章

品補此卷由欠第
(78)

(卷尾)

長安終南太一山豊德開利寺訖經沙

門雲勝游礼費行借忘第二第十二卷

咸平元年上表乞続編入開元年智昇撰錄後來唐玄肅代德四朝七人三
藏所翻并(79) 聖朝四人翻訳并 聖製三藏集傳一千余卷今取聖胄集補
之闕第十

すなわち、本書はすでに北宋初めの咸平元年（九九八）、雲勝による入藏の際に、欠巻の巻二は『聖胄集』で補充したが、なお巻一〇は欠巻だったのである。あたかも、巻二と巻八の巻首におかれる「秦 新編入錄」の五字は金蔵開雕の際のものであろうが、巻四の巻首に刻される「農 新編入藏」の農字は、雲勝の入藏時における函号の遺存であろうか。ちなみに、秦は六一五号、農は六五二号で、はるかにへだたる。また、元代の『至元法寶勘同總錄』には、

宝林伝九卷 宋陵沙門智炬集

上一集九卷一帙 嘉字號(80)

とみえる。嘉字は五九九号であり、本書の宋・金・元、三朝入藏の状況を知らしめるものである。

本書の存佚状況は、つぎのとおりである。

(全存) 卷一（但し『聖胄集』による補充）、卷四、卷八

(断欠) 卷一（首部八〇行、首部に近く三六行、尾部、各欠）、

卷三（首部二行半、首部に近く九行半、各欠）、卷五（首

部二五行半欠)

(全欠) 卷六・七・九・一〇

ただし、周知のとおり、卷六の零本一巻がわが京都青蓮院から発見され、公開せられており、その他の欠巻⁽⁸¹⁾部分における逸文は、筆者が集成して検討をくわえておいた。

なお、本書に関する書誌や研究については、駒沢大学禅宗史研究会編刊『訳注宝林伝』卷一と卷二の各解題が最新の成果である。

⑤景德伝燈錄

本書については、「広勝寺大藏經簡目」に

(禪一云) 景德伝燈錄三十卷宋道原撰
三卷主帙
全欠(83)

とあって、金蔵本の現存はわずかに三巻だけの零本なることが知られる。そのためか、本文はこれまで公開されず、将来の大陸版『中華大藏經』における影印刊行を鶴首したい。なお、禪・圭・云の函字は、六二一号から六二三号に相当する。

四、思渓版

思渓版大藏經は、湖州版や浙本などとも呼ばれるが、前思渓藏と後思渓藏の二種に分けられる。前者は浙江の湖州帰安県松亭郷にある思渓円覚禪院において、王氏一族の力によつて開版された藏經である。その完雕は、南宋の紹興二年（一一三二）をあまり下らないころ、といわれる。全体的に題記や刊記はなく、各帖ごとの末尾に音釈を付す特徴がある。その全蔵の目録が、『思渓円覚新雕大藏經律論等目録』二巻である。

「広勝寺大藏經簡目」によれば、本書は最終函におかれ、左のごとく記載される。

六八二帙

(幾) 万善同帰集三卷延壽述
存一卷(84)

蔣唯心氏は「金蔵雕印始末考」において、天字に始まり幾字に終る、元来七〇〇〇巻におよぶ金蔵の棹尾をかざる最終巻に本書がおかれたのは、功德円満の意を示すためである、と解説されている。⁽⁸⁵⁾

しかし、本書も零本であるためか、これまでに未公開であり、これまた大陸版『中華大藏經』での初公開がまたれるところである。

⑥万善同帰集

延寿の撰述にかかる本書は、宋元代の大藏經では金蔵だけに含まれる。他に宋版の単行書は存在するものの、入蔵書としては最古のキテントである。

後思渓藏は、南宋中期に思渓の円覚禪院が改称した法寶資

福禪寺において、新たに前蔵を復興し、前蔵が合字（五四八号）に終るものに加え、二四部四五〇巻を追雕した蔵經である。完雕後も印經活動を続けたが、景炎元年（一二七六）に寺が焼失し、終熄をとげた。この後思溪版の目録が、『安吉州思溪法寶資福禪寺新雕大蔵經目録』二巻である。

当面の禅籍は、前思溪蔵の目録には皆無である。『慈受広錄』の撰者で知られる雲門宗の懷深（一〇七七—一一三二）を開山第一祖に迎えて蔵經開版をはじめた思溪円覺院にして、

禅籍を入蔵させなかつたのはなぜであろうか。前思溪蔵が、『開元錄』に忠実な北宋勅版蔵經の再興を企つたという性格もさることながら、燈史類を中心とする禅籍は、當時、すでに寺版が盛んに流布していたからなのであらうか。

一方、後思溪蔵の目録をみると、済・感字に『宗鏡錄』一〇〇巻、魏・因字に『大藏一覽集』一一巻、の二種が記載されている。⁽⁸⁶⁾ 済字は五四九号であつて、ここからが後思溪蔵の追雕部分であるといわれる。

わが国への思溪版蔵經の伝来は少なくない。この版を中心構成される蔵經の所蔵機関には、東京増上寺・日光輪王寺・埼玉喜多院・愛知岩屋寺・岐阜長瀧寺・京都大谷大学・奈良唐招提寺・同興福寺・同長谷寺、などが知られる。⁽⁸⁷⁾

右の所蔵者中、目録が公刊されているのは、増上寺・喜多院・長谷寺の三ヶ寺である。しかし、増上寺のものは前思溪

蔵で禅籍皆無、喜多院は宋元の混合蔵であつて、『宗鏡錄』を有するものの元版による補充、長谷寺蔵經にも禅籍はみあたらない。

したがつて、その他の機関のいずれかに当該の禅籍二点は現存していると思われるが、目下のところ、それを具体的に指摘できず、今後の調査を期したい。

五、磧砂版

磧砂版といわれる蔵經は、平江府（蘇州）城東磧砂の延聖院で雕造された大蔵經であり、その着手は南宋の紹定四年（一二三二）ごろである。三年後の端平元年（一二三四）には、全蔵の完成予定書目である『平江府磧砂延聖院新雕大蔵經律論等目録』二巻を刊行したが、大火等で未刊のまま南宋は滅亡した。元の大德三年（一二九九）ごろ、この大蔵經が復興され、延祐二年（一二一五）ごろ、追雕部分も含めて全蔵の完成をみた。

その遺品は少なかつたのであるが、近年、西安の臥竜寺・開元寺などから全蔵が発見され、一九三一年から五年間を要して、その影印版が上海から『影印宋版蔵經』六〇函として刊行された。この影印版も本邦では稀覯に属していたが、最近刊行された台湾版『中華大蔵經』第一輯の大部分は、右の影印版の再印である。もっとも、これらの影印は、磧砂版に

欠ける部分を他の蔵經で補充しているから、資料として用いられる際には充分に注意しなければならない。

磧砂蔵經は、思溪藏の版式を踏襲して、宋刻部分は前思溪藏に依存し、元代の追雕部分は普寧寺蔵經に倣つたといわれる。禪籍の収録状況をみると、端平元年刊行の目録には皆無であるが、影印本にはつぎの七種が収められている。

- ①『景德伝燈錄』三〇巻

- ②『宗鏡錄』一〇〇巻

- ③『伝法正宗記』九巻

- ④『伝法正宗定祖圖』一巻

- ⑤『伝法正宗論』二巻

- ⑥『輔教篇』三巻

- ⑦『天目中峰廣錄』三〇巻

これらの書目を前代の蔵經中の禪籍に照らすと、開元版のそれから『広燈錄』『続燈錄』の燈史二書をはずし、また、『大慧語錄』に代って当代の『中峰廣錄』を配した体裁となつている。以下、個々の書について整理しよう。

①景德伝燈錄

本書は、台灣版『中華大蔵經』第一輯第三三冊に影印されるが、欠巻や欠紙部分は元版と明版により補配されている。いま、その「補頁表」により、逆に磧砂版の現存部分をさぐ

ると左記のとおりとなる。

卷二一七、八（尾欠）、九、一、一二（首欠、及び中間以後欠）、一三、一四、一五（首部のみの断簡）、一六、二〇、二五、二六（中間欠）、二八（首欠）、二九（首欠）

右のごとく、本書の磧砂版本來の現存分量は、全影印分の約 $\frac{1}{3}$ にすぎない。これらの部分は振・纓・世の函号をもち、卷末には音釈をおく。また、左記の貴重な刊記二点と筆者銘が刻されている。

平江路万寿禪寺持淨比丘惟謹發誠心回施淨資及募

縁恭入 磧沙延聖寺大蔵經局刊雕

仏祖伝燈三十巻永遠流通仰願

般若大智光明遍曇十方尽虛空遍法界乃至微塵刹土凡是有情

遇斯光者一聞千悟獲大慤持發菩提心永無退轉四恩等報三有

普資法界冤親同圓種智者

大德十年三月 日比丘惟謹願

（卷一一、末尾）

平江路在城月林庵昌院主捨中統鈔三定刊雕經三卷上根

四恩下資三有

大德十年七月初一日意

（卷一四、末尾）

弟子陳道厚書

比丘寿介敬書

比丘若珍敬書

右の刻記により、本書は大徳一〇年（一二〇六）ごろ、万寿

寺惟一などの尽力によつて磧砂藏に追雕されたものである。

与えられた函号は、福州版二蔵のそれと同じであり、また、

音釈は開元寺版のものに等しい。

刊雕功德上答

四恩下資三有法界有情同霧利益

延祐二年歲在乙卯八月

日題

（卷四三、四五、四七、四九、六一、六三、六四、六八、七
四、七六、七八、九二、九三、九五、九六、各卷末尾）

平江路磧砂延聖寺大蔵經局伏承

本路嘉定州円通寺住持了堂長老伏覩本寺刊雕

一大蔵經板勝事思念

法宝勝緣千生難遇夙何善種今幸遭逢由是發心施中統鈔壹百定助緣

刊雕功德上答

四恩下資三有法界有情同霧利益 延祐二年歲在乙卯八月 日題

（卷六六、七一、各卷末尾、但し後者は文中「壹百」を
「五十」となす）

天台比丘法思重校

（卷一二、一六、一八、二〇、各卷末尾）

右のごとく、本書は全一〇〇巻中、約八〇%の遺存であるが、本来の函号は済（五四九号）から感（五五八号）までであり、これは後思溪藏の函号に等しい。また、ほとんどの巻末に音釈が付されている。さらに、遺存部分には、左記の助縁刊記・重校記をとどめる。

平江路磧砂寺大蔵局伏承

妙明円悟普濟仏心大禪師本路嘉定州大報國円通寺住持比丘明了伏

觀本寺刊雕

一大蔵經板勝事思念

法寶勝緣千生難遇夙何善種今幸遭逢由是發心施中統鈔壹百定助緣

（5）伝法正宗論

（3）伝法正宗記

（4）伝法正宗定祖図

⑥輔教篇

これらの四書は、みな『中華大藏經』第一輯第三七冊に影印収録されるが、欠巻部分はいずれも元版と明版による補充である。磧砂版の現存部分は、巻次編成が流布本（大正蔵經本）とは異なり複雑なので、以下、これを対照して表示しておこう。（なお、正蔵中の『輔教篇』は『譚津文集』に所収）

大正蔵經本		磧砂蔵經本〔函帙〕	補版
伝法正宗記	卷第一		
下 中 上	卷第一	（全欠）	
下 中 上	卷第一	（全欠）	
下 中 上	卷第一	（全欠）	
下 中 上	卷第一	（約五）	
下 中 上	卷第一	（約六）	
下 中 上	卷第一	（約七）	
下 中 上	卷第一	（約八）	
下 中 上	卷第一	〔法一〕	
下 中 上	卷第一	〔法二〕	
下 中 上	卷第一	〔法三〕	
下 中 上	卷第一	〔法四〕	
明、永樂藏本	明、永樂藏本	元、普寧藏本	元、普寧藏本

上に表示したことく、磧砂蔵本は、『伝法正宗記』の巻八までを約字函（五八七号）、同巻九以下と『輔教篇』を法字函（五八八号）におくという異例の体裁をとる。その理由は、もともと底本が流布本の巻九に相当する部分から『輔教篇』までを別箇に通巻扱いとしていたからである。いつたい、磧砂蔵本の底本はなんであつたのだろうか。

ありがたいことに、これを知らしめる巻首の題記が、遺存部分に存在する。同じく巻八の刻記とともに次に示そう。

平江路磧砂延聖寺大藏經局今依福州開元禪

寺校定元本伝法正宗記一十二巻重新刊板流通祝延

聖壽万安者其明教大師所上之書及入藏劄子

旧本皆在表尾今列於首庶期展卷備悉所從

延祐二年歲在乙卯五月 日住持伝法比丘清表題⁽⁸⁹⁾

（巻首）

當寺沙弥普會書

蔣達刊⁽⁹⁰⁾

（卷八・末尾）

この題記は、磧砂蔵中もつとも遅い刊記であるが、延祐二年（一二三五）五月、時の磧砂延聖寺の住持清表みづからが本書を雕造したことを示す重要な記録である。のみならず、磧砂版の『伝法正宗記』の底本は開元寺版であり、その開元寺版は校定本であったが、契嵩の上進や入藏劄子等の諸文は巻

帙の末尾に存したことを明記するなど、書誌的にもすこぶる貴重な資料性に富む。さきにみた開元寺本では、諸文はまさしく『正宗論』の末尾におかれており、右の題記と符を合する。

なお、『輔教篇』の遺存部分にも、左記の筆写子や刻工の刻記がみられる。

丁卯冬沙弥良祐書⁽⁹¹⁾

当寺沙弥

良祐書
蔣刊⁽⁹²⁾

(卷上、末尾)

雲居禪菴住持比丘 智怡
耆旧比丘 智昭 智瓊

(卷三、末尾)

右にみえる丁卯は難解であるが、一三二七年とすれば、碛砂藏完雕以後の補刻時期などを示すものであろうか。

⑦天目中峰広録

元代の禅匠、中峰明本（一二六三～一三三三）の語錄が含まれることは、碛砂藏の特徴の一つである。本書も『中華大藏經』第一輯第三七冊中に影印収録されるが、明版による補充がすこぶる多い。いま、碛砂版本來の巻数をさぐると、次の通りである。

卷二～三、四（首欠）、五～一〇、一一中～一二上、二七上

右のごとく、遺存はわずかに^{1/3}ほどであり、とりわけ首尾の巻を欠くのが残念である。函号は韓・弊・煩であって、韓の五八九号は前書『補教篇』につづく。遺存部分には、かな

りの捨錢刊記がみられるので、左に記載しておく。

三宝信士播原亮 丁雋【播性】

沈氏妙円 顧氏妙清 顧氏妙明
顧氏妙善 翁氏善惠 善財奴
千勝奴 観音奴

已上一卷施財重刊所冀善芽增長寿

算延長家門百事無虞出入諸縁有慶

已上一卷信士張普福 周普果
張璗 顧氏妙清 保奴 施財重
刊報答四恩三宥者

(卷五之下、末尾)

此丘可持 助字四百字 欧円鎮 助字一千

趙彥良 胡氏妙清 趙文義 双氏妙鏡

仲氏妙円 黃德修 陳壽 吳義心

駱居仁 各助二伯字 薛德攸 助四百字

(卷六、末尾)

雲居禪菴比丘 德戈

已上一卷 施財重刊

(卷七、末尾)

已上一卷奉仏信士潘普堅

黄善正 施財重刊報答

四恩三宥者

(卷八、末尾)

奉仏信士吳必興 嚴德圭 嚴覺智
善女人俞氏妙清 沈氏淑清每名
助字二千報答四恩三宥者

(卷一 中、末尾)

奉仏居士徐 智安

已上一卷

募衆縁成就

比丘智朗 智昊 初善 德実

了一 原在 信士 湯德懋 朱道貞

楊淨端 許德盛 各助一千字

(卷一一下、末尾)

この蔵経は、南山普寧寺版・大普寧寺版・杭州版、などと呼ばれている。杭州路余杭県の白雲宗大普寧寺で雕造された大蔵經である。元の至元一三年(一二七六)にはじまり、同二七年(一二九〇)に完成した。そののち、大德三年(一二九九)に『杭州路余杭縣白雲宗南山大普寧寺大蔵經目録』四巻が刊行されている。

(卷一二上、末尾)

信士鄭旺永富 陳富 王長生 吳誠 沈宗寧
郭諒 張維 嚴氏妙堅 嚴氏妙名 閻善才
馮捨觀 柯氏三娘 張氏妙堅 高氏善信 胡氏妙清
吳氏二娘 徐氏妙淨 鄭氏永福 每名助字二百

(卷一二七上、末尾)

本蔵經は、思渓藏の重版をめざしたため、版式・音釧・目録などは前思渓藏を範としたが、福州版二蔵等とも校合した⁹⁴善本である。磧砂版と同様、各巻末に多くの募縁刻記を存するものが特徴である。

右の刻記のごとく、本書は多くの在俗信者の助縁によつて開版をみた重刊書であった。その入蔵は、いずれの『中峰広錄』のテキストにも收められる、巻末の大普慶寺善達密的理

による「謝降賜入蔵并封号國師表」の記事によつて、元統一年(一三三四)の補入であったことは明らかである。『中華大蔵經』の影印収録本における巻三〇は、明の永樂本による補充であるが、この箇所に右の記事が存することにより、永樂本は磧砂版の重刻なることを教えるものである。

六、普寧寺版

わが国には本蔵經の伝来本が比較的に多く、これを主とする構成をもつのは、東京増上寺・同浅草寺・岐阜安國寺・滋賀園城寺・京都東福寺・奈良西大寺、などの蔵經が知られる。しかし、目録の刊行されているのは、これらの中で増上寺・浅草寺のみである。

普寧寺版に入蔵している禪籍は、わずかに『景德伝燈錄』と『宗鏡錄』の二種だけである。以下、これを整理しよう。

①景德伝燈錄

本書は、『杭州路余杭縣白雲宗南山大普寧寺大蔵經目録』卷四に次の記載がなされ、福州版や磧砂版と同様、振・纓・世の函号をもつことがわかる。

振十卷

1285 景德伝燈錄一十卷

纓十卷

景德伝燈錄一十卷

世十卷

景德伝燈錄一十卷⁽⁹⁵⁾

本邦の所蔵者については、増上寺の蔵經は該当函に他經が

収められ、他にもみいだされない。また、浅草寺の蔵經については、かつて筆者の調査の結果、やはり該当函は延祐三年（一三一六）刊行の単行書で補配されていた。したがって、他の安國寺・圓城寺・東福寺・西大寺のいずれかに所蔵されていると思われるが、にわかに明示することはできない。

ところで、『中華大蔵經』第一輯第三三冊には、磧砂版『景德伝燈錄』を影印収録するが、その欠巻部分は普寧寺版と明の永樂版による補充であった。いま、普寧寺版による補充個

所を「補頁表」によつてさぐると、つぎのとおりである。

(一) 内は『中華大蔵經』第一輯の通しページである。

卷一一首部に近い部分(一八七〇八上～中)、末尾に近い部分

(二八七一〇下)

卷八一末尾(二八七五八上～二八七五九中)

卷一二一首部(二八七八〇中)、中間(二八七八三上～二八七八八下)

卷一八一全卷(二八八二九下～二八八四五中)

卷二七一首部に近い部分から中間まで(二八九一一上～二八九一四上)、同末尾近くの部分(二八九一五中～下)

卷三〇一全卷(二八九三五中～二八九四三上)

右の補充版の所蔵者は、卷一～二七が晋城青蓮寺、卷三〇は雲南の昆華図書館であるが、これらはすでに半世紀以前の所蔵であり、現在の所蔵状況は不明である。

このように、『中華大蔵經』には普寧寺版の一部を収録するにすぎないが、卷一八と三〇は全巻が収められ、各巻末に音釈のあることを知らしめる。のみならず、卷三〇の末尾には左のごとき貴重な刊記をとどめている。

杭州路南山大普寧寺伏承

当寺比丘明月発心施財入大蔵經局刊
伝燈錄第九卷至十卷所集

殊利專為祝扶

父親施忠信母親潘氏二娘子辛亥癸卯各位本命星天資陪

福筭所冀現生之内福寿康寧他報之中解脱自在者

れる。

泰定元年八月 日当山住持 明実謹題

(卷三〇、末尾)⁹⁶

本書の刊記といえば、小野玄妙氏も『仏教經典總論』の中に、本邦のいずれかの所蔵本によつて卷二のそれを著録しているので、左に転載する。

杭州路南山大普寧寺比丘崇恩謹發敬心捨財刊

景德伝燈錄第二卷補入大藏印造流通所集功德敬用莊嚴円寂先師和尚起岩寺主仏性普恵大師 円寂師兄景山

止監寺二位覺靈同登上品共証菩提彼岸

延祐四年三月 日 比丘崇恩 謹題

杭州路南山大普寧寺耆旧比丘崇福

茲謹發心施財入本寺經局助刊

伝燈錄世字第二卷所集

殊勧上報

四恩下資三有者

泰定元年八月 日比丘 崇福謹題⁹⁷

(卷二、末尾)

に掲載しよう。

②宗鏡錄

本書は普寧藏目録の末尾近くに、左の記載がなされている。

濟十卷漢十卷惠十卷說十卷綺

廻十卷漢十卷惠十卷說十卷感

1430 宗鏡錄一百卷⁹⁸

すなわち、本書は後思溪版や磧砂版と同じく、濟・感の函号を有する。本邦における所蔵は、喜多院・増上寺・浅草寺が確認される。

まず、喜多院の蔵經は、主流は思溪版であるが、全藏の詳細な目録である『喜多院宋版一切經目録』によれば、『宗鏡錄』は普寧版の補配である。ただし、卷二八と九一の二帖を欠き、卷八一は江戸期の写本である。この目録中には、本書のほぼ全巻に存する刊記と重校記、および稀に存する印造記、などを収録するので、その中の主要なものを摘出して左に掲載しよう。

杭州路南山大普寧寺大藏經局伏承 湖州路烏程縣常樂鄉二十九
都日成舍居住奉仏弟子閔 汝霖同妻鄭 妙淨 与家眷等

謹施淨財刊造

大藏尊經壹函所將功德仰報

四恩普資三有法界冤親俱沾勝利者

至元二十二年十一月 日住 山积 如賢

(卷一一)

四恩□有父母宗親更冀自身平善者
至元二十二年六月 日^(マ)住^(志カ)山积^(志カ)如忠題

杭州路南山大普寧寺大蔵經局伏承 湖州路□程県徳政郷横欄堤居奉

仏弟子□智澄 同葉□施財刊開

尊經壹卷功德報答□

嘉議大夫耽羅軍民万戸府達魯花赤高麗國匡靖大夫都僉議評理

上護軍朴景亮

自撰非才幸塵有位籍庇

弘天之巨海涵恩

聖沢之陽春愧居天地之間莫効涓埃之報謹捐淨財印造

聖典全藏奉安于神孝寺永充供養流通教法所集鴻因端為祝延

皇帝聖寿万歳

皇太后齊年

潘王 国王壽齡延永福祿增崇仍願考妣即登淨域見

仏聞法延及自身康寧壽考恒祿位在生則安世緣於順境終身則超

善会之樂邦願與拳世吉人同証菩提彼岸無人無我悉潛心

獅座之真詮有相有情共拭目

童華之妙会者

皇慶三年三月

日謹誌

(卷一二)

杭州路南山大普寧寺大蔵經局伏承 湖州路烏程県徳政郷錢村居奉

仏弟子劉真妻陳氏三娘 同潘道立施財刊開

尊經壹卷功德各悼

杭州路南山大普寧寺大蔵經局伏承 湖州路烏程県徳政郷濡山横欄

(卷二九)

杭州路南山大普寧寺大蔵經局伏承 湖州路烏程県徳政郷橫欄堤居奉

仏女弟子錢氏五娘行年五十三歳十二月初二日寅時建生施財刊開

尊經一卷功德上報

四恩三有資悼生身父母養育劬勞次薦

繼父李十八承事 繼母朱氏百娘子仍保自身平善者

至元二十二年十二月 日住山积 如賢題

(卷二五)

杭州路南山大普寧寺大蔵經局伏承 湖州路烏程県徳政郷横欄堤居奉

仏女弟子朱三九娘同湯三九郎 施財刊開

尊經壹卷功德上薦

□承事 先考湯十承事 先妣錢氏四十二娘子超昇

至元二十二年六月 日住 山积 如志 題

(卷二六)

杭州路南山大普寧寺大蔵經局伏承湖州路帰安縣松亭郷十八都何□

村程蔣奉□

仏女弟子謝氏六娘同男楊安 施財刊開

尊經壹卷功德上薦(以下欠)

(卷二七)

湧居奉

仏弟子朱氏二娘同朱□□施財刊開

尊經壇卷功德各悼

父母宗親同生

淨土更冀自身平善者

至元二十二年六月

日□^(住)山釈

(卷三一、卷末)

杭州路南山大普寧寺大藏經局伏承

湖州路武康縣崇仁鄉三都

崇慶院比丘如鑑施財刊開

尊經壇卷功德報答

恩有者

至元二十三年正月

住山釈

如賢題

(慧元重校刊記)

(卷三五)

杭州路南山大普寧寺大藏經局伏承

湖州路烏程縣常樂鄉後林村

葉保居奉

仏弟子葉泰身同妻潘百七娘施財刊開

(慧元重校刊記)

(卷三六)

嘉興路嘉興縣?林鄉學秀村車□里春山院比丘

如親謹發心施寶鈔

三十貫入

南山大普寧寺大藏經局刊造

尊經壇卷功德答報

□

(卷三八)

また、増上寺本については、△増上寺史料集▽別巻『増上

右の諸記によれば、本書は至元二十二年(一二八五)以後において普寧版に補雕されたものである。釈音の存する巻次は、二二～二四、二七、二九、三一～七四、七七～八〇である。本書の磚砂版が『中華大藏經』一一三五に影印収録されることは前述のとおりであるが、欠巻を補充する中で、この普寧版が用いられる箇所を示しておこう。

卷一～卷三の中間(三〇三九四上～三〇四〇九下)、卷四の首部に近い部分から末尾まで(三〇四一三中～三〇四一七中)、卷五の首部に近い部分(三〇四一八上～三〇四一九上)、同末尾近くの部分(三〇四二二中)、卷六の首から約 $\frac{1}{4}$ 、(三〇四二三中～三〇四二八上)、卷八～卷九の巻首(三〇四三三下～三〇四三八下)、卷九の中間から末尾(三〇四四二上～三〇四四六下)、卷一一の首部に近い部分から末尾(三〇四五三中～三〇四五七上)、卷一五の中間から末迄(三〇四七四上～三〇四七七上)、卷一九(三〇四九六上～三〇五〇一中)、卷五一の首部(三〇六九〇上～中)、同末尾に近い部分(三〇六九四上～中)、卷一〇〇の末尾近く(三〇九二九下～三〇九三〇中)

もとより断片的ではあるが、右が普寧版の原文部分である。

なお、この影印部分の原本所蔵者は、卷一～卷三の中間までが北平松坡図書館で、他は晋城青蓮寺であった。現在の所蔵は不明である。

七、元代官刻版

元代における官刻の蔵經といえば、金蔵の板木を承けついで燕京弘法寺で引経した、いわゆる弘法寺版蔵經がある。しかし、この蔵經の遺品は今日ほとんど伝来せず、したがつて、そのテキストをみるとことはできない。

これに対し、ここでとりあげる元代官刻版とは、一九八四年一二期の『文物』に紹介され、はじめて学界に知られることがなった別の大蔵經である。すなわち、右誌上には、童瑋・方広鋸・金志良の三氏による共著である「元代官刻大蔵經的発現」なる注目すべき論文が掲載されている。わが国では、いまだ紹介すらなされていないと思われるが、拙稿とも関係の深い論文であるから、以下、当面の入蔵禅籍に関する部分を中心に、紹介をしておきたい。

まず、この元代官刻大蔵經とは、すでに一九七九年に雲南図書館から発見され、弘法寺版とみなされていた元刻蔵經本一三巻の零本を、一九八二年暮から翌一九八三年初めにかけて再調査した結果、全三二巻の元版蔵經本を発見し、それが弘法寺版ではなくして、別の官版蔵經であることが紹介・論証されているのである。この元槧本は、一紙四二行一七字の大版で、從来まったく未知の版式と装訂を有する蔵經本といわれる。

いま、とくに注目されるのは、右の新発見三二巻の中に、『大慧普覺禪師住徑山能仁禪院語錄』の卷一～五の零本が含まれていることである。その卷一の末尾には長文の職名録が刻記され、秦王答刺寧太師伯顏から昭信校尉析成局大使蘇重児にいたる三八名の名が排列されているという。これらの官職名を冠した大勢の氏名は、この官刻蔵經の雕造年代の考証にとって、重要な資料となるものである。

右の『大慧語錄』は、いわゆる三〇巻本の卷一～五に相当し、函号は治に始まる。したがって、全三〇巻は治・本・於の函号であったはずで、千文字の六四九号～六五一号に当る。このことは、この官版蔵經が、本来はすくなくとも六五一〇巻以上で構成されていたことを示唆し、元代における最大規模の大蔵經であったことの傍証となるものである。

以上が、「元代官刻大蔵經的発現」中の禅籍に関する紹介の梗概である。これまでみてきたごとく、『大慧語錄』の入蔵は福州版両蔵のみであった。等しく有する多・士・寔の函号は、五六一号～五六三号であった。このことからも、この元代官刻版には、もともと多くの他の禅籍が入蔵していたものと推定される。

また、右に紹介される職名録なる刻記は、この経板の開雕に關与した者の列名とみられる。とすれば、元代における『大慧語錄』に対する関心の度合いの一面を示すと思われる

点で、それは注目に値するものである。

以上、宋・金・元、三朝の大蔵經における入藏禪籍について、現藏典籍の書誌と文献整理を試みてきた。もとより限られた調査にゆづくからには、謬脱ある」とをおそれ、今後の補訂を期するるのである。また、『普燈錄』の「」、「」、従来は宋代の入藏書とされながら、上掲の「」の蔵經にも入藏していないことの意味などについても、ふれることができないかった。いまは、さらに蔵經別による現存禪籍の一覧表を付して、斯学の便に供したい。

註

- (1) 「大蔵經と禪錄の入藏」(『岳仏研』110—1)、なお『禪學叢書』之六に再録。
 - (2) 『光讚般若波羅蜜經』卷九、『法苑珠林』卷一、『景德叢燈錄』卷一の各題記にみえる。原文は小野玄妙『仏教經典總論』p.783 a を参照。
 - (3) 以下の宋元版各大蔵經の概説は、次の各書を参考とした。
 - 〔1〕大蔵會編『大蔵經—成立と変遷—』(昭和三九年、百華苑刊)、
 - 〔2〕小野玄妙『仏教經典總論』(『仏書解説大辭典』別巻、昭和二一年、大東出版社刊)、〔3〕「増上寺三大蔵經目録解説」(増上寺史料集別巻『三蔵經目録』付録、昭和五七年、続群書類從完成会刊)、〔4〕『重要文化財』11
- (4) 大正蔵經別卷「昭和法住總目録」1-818 c
 - (5) 同、1-877 a
 - (6) <高野山学志>第1編、昭和六年刊。なお後に『水原堯栄全集』第四卷(昭和五六年、同朋社刊)として覆刻。
 - (7) 『高野山現存蔵經目録』p. 235
 - (8) p. 521~523
 - (9) 昭和法住總目録、1-818 c ~819 a
 - (10) 同、1-877 a ~ b
 - (11) 『高野山現存蔵經目録』p. 258~259
 - (12) 同、p. 523~524
 - (13) 「東寺經藏の北宋本『一切經』就」と(4)」(『仏典研究』)|一八)
 - (14) 『仏教經典總論』p. 785 a
 - (15) 本文篇 p. 209
 - (16) 昭和法住總目録、1-819 b
 - (17) ハの御製序の禪錄上における意義については、前掲柳田氏の論文にくわしい。
 - (18) 昭和法住總目録、1-819 b
 - (19) 小野氏前掲論文
 - (20) 『高野山現存蔵經目録』p. 259
 - (21) 同、p. 524~525
 - (22) 柳田氏前掲論文
 - (23) 昭和法住總目録、1-819 b
 - (24) 小野氏前掲論文
 - (25) 『高野山現存蔵經目録』p. 259

- (26) 同、p. 525～526
- (27) 昭和法宝総目録、1-849 a
- (28) 同、1-877 b
- (29) 同、1-819 b
- (30) 同、1-877 b
- (31) 小野玄妙『仏教經典總譜』p. 786 b、『大藏經—成立の歴史—』p. 47等
- (32) 昭和法宝総目録、1-822 c
- (33) 「東寺經藏の北宋本」印綱に就いて(上)」(『古典研究』)――
- (34) 大正藏 48-811 a～b
- (35) 同、48-943 a～b
- (36) p. 105 b
- (37) 昭和14年、東京嚴松堂刊
- (38) 『京都大学谷村文庫目録』p. 47 じゅ簡単な記載がみえる。
- (39) 小島惠昭「本源寺藏宋版」印綱(三聖寺旧蔵)目録」(『国學院佛教文化研究所紀要』創刊号)
- (40) 鈴木哲雄・椎名宏雄「宋・元版『景德法燈錄』の書誌的考察」(愛知学院『禪研究所紀要』四・五合併号)。なお本小稿の文責は椎名宏雄。
- (41) p. 104 b-105 a
- (42)(44)(45) 昭和法宝総目録、1-904 b
- (43) p. 32 b～33 a
- (46) 「釋尊叢書」之五、所収本による。
- (47) p. 131 b
- (48) 昭和法宝総目録、1-786 a～b
- (49) 小島氏前掲目録
- (50) 『図書寮漢籍善本書目』p. 105 a
- (51) 昭和法宝総目録、1-786 b
- (52) p. 131 b
- (53) 昭和法宝総目録、1-904 b
- (54) 同、p. 819 b
- (55) 『大藏今廢觀目録』(昭和56年、文華堂書店) p. 278
- (56) 小島氏前掲目録
- (57) 昭和法宝総目録、1-904 b
- (58) 同、1-790 a
- (59) p. 120 b
- (60) p. 121 a～c
- (61) 昭和法宝総目録、1-904 c
- (62) 小島氏前掲目録
- (63) 『仏教經典總譜』p. 812 a
- (64) 大正藏 51-715 a～716 b
- (65) p. 205
- (66) 昭和法宝総目録、1-904 b
- (67) p. 106 b
- (68) 昭和法宝総目録、1-789 c
- (69) p. 118 b
- (70) 大正藏 47-811 欄外注。なお鷄養徹定『古經搜索錄』中にあるこの題名による題詔を取めるが、これがの藏經によるとかは不明である。

宋 元 版 大 藏 經 現 存 梵 緒 一 覧

梵 緒 名	卷数	成立	東 神 寺 版 1080~1112 統1189	開 元 寺 版 1112~1151 統1176	金 藏 版 1149~1178 統1235	思 淡 版 ~1132~1276	頑 砂 版 1231~1325	普 寧 寺 版 1277~1290 統1386	元 代 官 版 ~1333~
1. 景 德 伝 燈 錄	30	1004	振511~世513 元35~5(1080~2)、音 ⑩⑪國	振511~世513 音 ⑩⑪國	拂621~云623 存3卷 固金函本 因			振511~世513 大德10(1306)、音 國 中華藏1-33	振511~世513 泰定1(1324) 國 中華藏1-33
2. 宗 繼 錄	100	961	祿514~茂523 大觀2~4(107~8)、音 ⑩⑪國	祿514~茂523 音 ⑩⑪國		濟549~應558 國 中華藏1-35	濟549~應558 延祐2(1315)、音 國 中華藏1-35	濟549~應558 至元2~4(1285~7) ⑩⑪國 中華藏1-35	
3. 伝 心 法 要 4. 宛 陵 錄	合1	~857	寔524 大觀3(1109) ⑩⑪	寔524 紹興18(1148) ⑩⑪					
5. 天 聖 広 燈 錄	30	1036	寔524~碑526 大觀2~3(1108~9) ⑩⑪國	寔524~碑526 紹興18(1148) 存28卷 國	九609~馬611 因				
6. 建中靖国 燈 錄	30	1101	刻527~舊529 崇寧2~3(1108~4) ⑩⑪國	刻527~舊529 紹興18(1148) 固金函東本因					
7. 大藏經綱目指要錄	8	1104	溪530 崇寧4(1105) ⑩⑪	溪530					
8. 大慧普覺禪師語錄 9. 大慧普覺禪師普說	30 1	~1171	多565~達567 乾道7~8(1171~2) ⑩⑪國	多565~達567 乾道7~8(1171~2) 因				治649~於651 (卷1~5) 國	
10. 伝 法 正 宗 記 11. 伝 法 正 宗 定 祖 図 12. 伝 法 正 宗 論	9 1 2	1061 " "						新587·法588 延祐2(1315) 國 中華藏1-37	

13. 輔 教 編	3	~1061		土582 国中華藏1-37	法588
14. 円 覚 経 略 疏	8	~841	術536 国		
15. 伝 燈 玉 英 集	15	1034		沙603・漢604 存9卷 国 中華藏1-38	
16. 円 覚 道 场 修 正 緯	18	~841		丹607・青608 存14卷 国	
17. 宝 林 伝	10	801		秦615 存6卷 国 中華藏1-38	
18. 萬 善 同 墓 集	3	~976	幾682 存1卷 国		
19. 大 藏 一 覧 集	11	~1157		魏574・國575	
20. 天 目 中 峰 広 錄	30	~1234		韓589～煩591 元統3(1335)か 國 中華藏1-37	

*各項の上段は函号、中段は刊時・存巻・音釈、下段は所蔵者・移録。なお、所蔵者の○は完本、□は欠本または零本を示す。

*所蔵者の略号：東－京都東寺、上－同上聖廟寺、知－同知恩院、南－同南禪寺、比－板山文庫、高－高野山金剛峰寺、本－愛知本源寺、浅－東京淺草寺、

増－同增上寺、喜－埼玉喜多院、官－官内庁書陵部、金－横浜金沢文庫、京－京大図書館、天－天理図書館、北－北京図書館、

広－霊山広勝寺、臥－西安臥龍寺、雲－昆華園書庫、青－晋城青蓮寺

- (71) 「大慧語錄の基礎的研究（上）」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』111 叙）
- (72) 大正藏 49-429 a
- (73) 「法燈王英集」の基礎的考察」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』九）
- (74) 昭和法華經田續 2-238 a
- (75) 『宋藏遺珍叙田』 p. 38 b
- (76) (77)(83) 回 p. 39 a
- (78) 『禪學叢書』5-19 a
- (79) 回 5-34 d
- (80) 昭和法華經田續 2-238 a
- (81) 常盤大定『法林伝の研究』に影印を収録。また、『宋藏遺珍』十一四に翻刻を取る。『中華大藏經』1—11八に再印。
- (82) 「法林伝」逸文の研究」（『駒沢大学仏教学部論集』11）
- (84) 『宋藏遺珍叙田』 p. 42 b
- (85) 回 6 b
- (86) 昭和法華經田續 1-925 c ~ 926 a
- (87) 『大藏經—成立と変遷—』 p. 54、『重要文化財』111、など。
- (88) いわゆる甲記は的確に「影印宋磧砂藏經の尾跋について」（『中華仏教研究会年報』1）よりも移録されたが、誤植がある。
- (89) 『中華大藏經』1-37-31982 a
- (90) 回 1-37-32029 b
- (91) 同 1-37-32054 b
- (92) 回 1-37-32060 a
- (93) 回 1-37-32216 c ~ 32217 b
- (94) 『大藏經尼乾子歌題記』卷1〇の題記中に、「然思溪福州11藏校本並下取記、而上無大字、今加大字者、蓋淮校勘、竹堂講師依杭州下寺藏写本、請閱者知之。直至元壬午南山大普寧寺經局題記。」（『法華經典總疏』p. 864 b）ある。
- (95) 昭和法華經田續 2-266 b
- (96) 『中華大藏經』1-33-28943 a
- (97) p. 865 b ~ 866 a
- (98) 昭和法華經田續 2-269 c
- (99) 「元版大藏經田續」 p. 342 ~ 343 たゞ、卷111 ~ 1八の平記は、前掲書多説本卷11の平記と全く異なる。
- (100) 『宋藏門建立誌』（昭和三九年、浅草寺刊）に所収。